令和３年度

公立大学法人広島市立大学の業務実績に係る評価結果

令和４年８月

広島市公立大学法人評価委員会

公立大学法人広島市立大学の各事業年度における業務実績の評価方法及び基準について

1　法人による自己評価

(1)　年度計画の記載事項ごとの実施状況を以下の５段階により自己評価し、評価理由と併せ、実績報告書に記載の上、評価委員会に提出する。

評価の記号	実施状況の説明
s	質・量双方において年度計画を上回って実施されている。
a	質・量いずれか一方において年度計画を上回って実施されている。ただし、他方において年度計画を下回って実施されている場合を除く。
b	質・量双方において年度計画どおり実施されている。
c	質・量いずれか一方において年度計画を下回って実施されている。ただし、他方において年度計画を上回って実施されている場合は、双方の実施状況を総合的に勘案して「b」とすることができる。
d	質・量双方において年度計画を下回って実施されている。

(2)　年度計画の小項目及び大項目ごとの自己評価についても(1)と同様とする。

2　評価委員会による評価

(1)　小項目評価

ア　「中期計画の達成に向けて、各事業年度の業務を順調に実施しているかどうか」という観点から、法人による自己評価を踏まえつつ、年度計画の内容の妥当性も含めて、小項目ごとに以下の５段階により評価する。

評価の記号	実施状況の説明
S	質・量双方において年度計画を上回って実施されている。
A	質・量いずれか一方において年度計画を上回って実施されている。ただし、他方において年度計画を下回って実施されている場合を除く。
B	質・量双方において年度計画どおり実施されている。
C	質・量いずれか一方において年度計画を下回って実施されている。ただし、他方において年度計画を上回って実施されている場合は、双方の実施状況を総合的に勘案して「B」とすることができる。
D	質・量双方において年度計画を下回って実施されている。

イ　評価委員会の評価が法人による自己評価と異なる場合は、その理由等を示すものとする。

(2)　大項目評価

小項目評価を踏まえ、大項目ごとに以下の５段階により評価するとともに、特筆すべき事項等があればその旨のコメントを記載する。なお、評価の記号ごとに以下の評点を付す。

評価の記号	実施状況の説明	評点
S	質・量双方において年度計画を上回って実施されている。	5
A	質・量いずれか一方において年度計画を上回って実施されている。ただし、他方において年度計画を下回って実施されている場合を除く。	4
B	質・量双方において年度計画どおり実施されている。	3
C	質・量いずれか一方において年度計画を下回って実施されている。ただし、他方において年度計画を上回って実施されている場合は、双方の実施状況を総合的に勘案して「B」とすることができる。	2
D	質・量双方において年度計画を下回って実施されている。	1

(3)　全体評価

大項目ごとに以下の評価比率を配分し、大項目評価の評点を加重平均（評点×評価比率を合計）した結果を基に評価する。また、法人による実績報告書の記述等を踏まえ、中期計画の実施状況に係るコメントを記載する。

大項目	評価比率
第２　教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置	
１　教育	２０％
２　学生の確保と支援	１０％
３　研究	１５％
４　社会貢献	１５％
５　国際交流	１０％
第３　業務運営の改善及び効率化等に関する目標を達成するためとるべき措置	
１　業務運営の改善及び効率化等	１５％
２　財務内容の改善	１５％

評価の基準	評価の記号等	
４．５＜X	S	法人の業務は、中期計画の達成に向けて極めて順調に実施されている。
３．５＜X≦４．５	A	法人の業務は、中期計画の達成に向けて順調に実施されている。
２．５＜X≦３．５	B	法人の業務は、中期計画の達成に向けて概ね順調に実施されている。
１．５＜X≦２．５	C	法人の業務は、中期計画の達成に向けて十分に実施されていない。
X≦１．５	D	法人の業務には、中期計画を達成するために重大な改善事項がある。

※　Xは大項目評価の評点×評価比率の合計

公立大学法人広島市立大学　令和３年度業務実績に係る評価

全体評価

評価の記号

Ａ：法人の業務は、中期計画の達成に向けて順調に実施されている。

評価コメント

令和２年度に引き続き、令和３年度も、新型コロナウィルス感染症の拡大によって法人業務は少なからざる影響を被った。そこで令和３年度の業務実績についても、前年度と同様の評価を行うこととした。すなわち、その評価にあたり、コロナ禍によって実施を断念した事業につきいかなる代替策がとられたのか、また逆にこのコロナ禍を機に、中期目標を実現するためにどのような措置が新たに講じられたのかも考慮することとしたのである。

総論として、コロナ禍への対応の過程において、パーソナル・コンピュータ（以下「パソコン」という。）の必携化、芸術資料館所蔵品のアーカイブの充実など、デジタル化が加速した。また、入試制度改革と並行して、早期に入学の決定する入学予定者を対象とした入学前教育にもオンラインを利用するなど、オンライン化も着実に拡大した。また、コロナ禍の中で困窮する学生への支援、そのための寄附の募集などの施策は、学生にとって心強いものであっただろうと想像する。他方で、研究活動については、そのための財源を一層積極的に確保して研究活動を更に活性化し、その副産物として大学院の定員充足も達成する好循環を期待したい。

個別項目について、「３　研究」に関連して、「広島発の平和学」の真価を発揮するべく意欲的な取組が重ねられている。「４　社会貢献」に関連して、市民の学習ニーズに応える公開講座等の開設、地域を拠点とした受託研究及び共同研究、そして地域に密着した芸術プロジェクトの展開などには、地域社会とともに歩む大学の姿勢がよく表れている。

組織、業務運営等に関する改善事項等について

組織、業務運営等に関し、特に改善を勧告すべき点はない。

全体評価（評点）

大項目名	評価の記号（大項目評価）	※1 評点（α）	評価比率（β）	α×β	評価の記号（全体評価）
第２　教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置					
１　教育	A	4	２０％	０．８	
２　学生の確保と支援	A	4	１０％	０．４	
３　研究	B	3	１５％	０．４５	
４　社会貢献	A	4	１５％	０．６	
５　国際交流	A	4	１０％	０．４	
第３　業務運営の改善及び効率化等に関する目標を達成するためとるべき措置					
１　業務運営の改善及び効率化等	A	4	１５％	０．６	
２　財務内容の改善	A	4	１５％	０．６	
計				※2 ３．８５	A

※1　「評点」は「評価の記号（大項目評価）」と連動する。Ｓ＝５点、Ａ＝４点、Ｂ＝３点、Ｃ＝２点、Ｄ＝１点

※2　「全体評価の記号」はこの数値（α×βの計）と連動する。

全体評価の記号	S	A	B	C	D
α×βの計(＝X)	4.5＜X	3.5＜X≦4.5	2.5＜X≦3.5	1.5＜X≦2.5	X≦1.5

項目別評価（総括表）

評　価　項　目	評価の記号
第２　教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置	
１　教育	A
(1)　教育内容の充実	
ア　全学共通教育	A
イ　学部専門教育	A
ウ　大学院教育	A
エ　特色ある教育	A
(2)　教育方法等の改善	B
２　学生の確保と支援	A
(1)　学生の確保	A
(2)　学生への支援	A
３　研究	B
(1)　研究活動の活性化	B
(2)　研究成果の積極的な公開及び還元	B
４　社会貢献	A
(1)　生涯学習ニーズ等への対応	A
(2)　社会との連携の推進	A
５　国際交流	A
(1)　国際交流の推進	S
(2)　日本人学生及び留学生への支援の充実	A
第３　業務運営の改善及び効率化等に関する目標を達成するためとるべき措置	
１　業務運営の改善及び効率化	A
(1)　機動的かつ効率的な運営体制の構築	A
(2)　社会に開かれた大学づくりの推進	A
２　財務内容の改善	A
３　自己点検及び評価	A
４　その他業務運営	B

項目別評価

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
第２　教育研究等の質の向上に関する目標 １　教育に関する目標	第２　教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためとるべき措置 **１　教育（大項目）**		**大項目評価** 〇全学共通教育内容の充実 ・3学部混成の少人数クラス（1クラス11人～12人）による必修科目「3学部合同基礎演習」（1年次前期）は、コロナ禍の中、担当教員等が効果的な授業となるよう工夫しながらオンラインで実施した。レポート作成方法等のリテラシー教育や「いちだい知のトライアスロン」事業の活用等を通じて、学生は幅広い教養と自己表現能力を養うことができた。 ・読書、映画鑑賞及び美術展観賞を奨励する「いちだい知のトライアスロン」事業については、「3学部合同基礎演習」や入学前教育とも連動させたことにより、感想レポート及び推薦コメント提出件数は第2期中期計画期間中最多の2,886 件に達し、目標値（年間2,000件）を上回った。また令和3年度は、トライアスロンコースを達成した3人の「知の鉄人」（全員4年生）が誕生した。 ・日本人学生と外国人留学生が母語を教え合う「ランゲージチューター制度」では、コロナ禍のため、前期はオンラインでレッスンを実施し、感染状況が改善した後期からはオンラインと対面を併用した。令和2年度と比べ、活動人数は減少したものの、活動実績は上回り、一人一人の活動内容は充実したものとなっている。 〇学部専門教育内容の充実 ・国際学部では、新カリキュラムの導入3年目、新領域認定の卒業要件化2年目に当たり、各年次・各プログラムにおいて、専門性と学際性を結びつけるための履修指導を丁寧に行った。また、アクティブ科目の海外留学やインターンシップを促すため、報告会を実施した。 ・情報科学部では、令和2年度から導入した「イノベーション人材育成プログラム」を含めた新カリキュラムの年次進行に伴い、「批判的創造的思考法」等の新規科目の開講、「プログラミングⅡ」等での習熟度別クラスの導入等を行った。「イノベーション人材育成プログラム」は、40人程度の募集に対して、70人を超え	a	〔評価理由〕 教育全般について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
			る参加希望があり、より意欲の高い学生を選抜した。地域に根ざした実践型人材の育成を目的として令和4年度から新たに開設する「産学連携教育」について、科目群の整備、科目内容の設計及び一部企業との試行的な連携教育を行った。積極的にデジタルツールを授業で活用し、その効果検証を実施するなど、教育のデジタル化の先導的な取組を行った。 ・芸術学部では、広島市と連携した「基町プロジェクト」は8年目を迎え、学生の作品展示等の体験の場を提供する「Unité（ユニテ：アートギャラリー）」や「Make（メイク：工房）」等において、様々な専攻の学生が作品展等を開催し、多くの学生等が鑑賞に訪れた。また、「基町小学校創立50周年記念事業写真展」をはじめ地域と連携した様々な取組を行い、多くの学生が参加した。年間を通じて延べ233人の学生が基町を訪れ、学び、表現活動を行うなど実践的教育を行った。 ・リメディアル教育については、「サポート教室」と称し、英語、数学、素描（そびょう）、デッサン及び塑造（そぞう）を開講し、基礎的な知識や技能等を補った。 〇大学院教育内容の充実 ・平和学研究科では、令和3年4月に博士後期課程を新設し、開設初年度に定員を充足するとともに、社会人や外国人留学生などの幅広い人材を受け入れることができた。 ・国際学研究科では、令和2年度末に作成した「社会人のためのスキルアップ履修モデル」を更新し、大学院ウェブサイトに掲載したほか、社会人修士1年制（社会人大学院生用の博士前期課程コース）案について情報収集し、課題を整理した。 ・情報科学研究科では、令和元年度から本格開講している、社会人向けリカレント教育講座「enPiT-Pro」事業で提供している一部科目を、大学院科目「情報科学特別講義」に試験的に取り込み、大学院教育の充実を図った。 また、「産学連携教育」の令和4年度開設に向け、自ら課題を選定する「自主プロジェクト演習」を見直し、地域企業及び自治体の課題を情報通信技術で解決する授業内容に変更した。 ・芸術学研究科では、引き続き、地域展開型の芸術プロジェクト等を積極的に行い、実践的教育を推進した。参加した大学院生は、それぞれのプロジェクトで主導的役割を果たし、創作能力及びマネジメント能力の向上が見受けられる。			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
			○国際社会及び地域の第一線等で活躍する人材の育成、平和関連教育など特色ある教育内容の充実 ・国際学生寮「さくら」では、日本人学生と外国人留学生との寮における共同生活そのものを、語学、異文化理解及び対人関係の構築等を学ぶ教育プログラムとして位置付け、学生役職者が中心となり入寮者全員で寮運営に取り組んだ。また、同施設を活用し、入寮者以外の学生が外国語を学ぶ教育プログラム「さくらでミニ留学」について、対象言語を英語のみから3か国語（中国語、韓国語及び英語）に拡充し、実施した。 ・「広島市立大学塾」の第4期のプログラム内容は、これまで実施してきたものを基本としつつ、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館及び回天記念館（山口県周南市）等の見学並びにゲスト講師を迎えての広島平和記念公園及び広島城周辺フィールドワークなど、現場で学ぶプログラムを充実させるとともに、「被爆体験証言を考える」及び「原発事故から見えてきたヒロシマ」などの新たなテーマのプログラムも加えて実施した。 ・「地域課題演習」及び「地域実践演習」も含めて、地域貢献特定プログラム科目を開講した。同プログラムを構成する科目の履修者は1,379人だった。また、「ひろしま地域リーダー」に例年並みの18人を認定した。 ・夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」は、コロナ禍により、令和2年度に引き続きオンライン講座としたが、単発講座から、4回（令和3年7月17日、24日、31日及び同年8月7日）にわたる連続講座に拡大し、プログラムを充実した。海外11か国及び国内7大学から全体で49人の参加があった。 ・地域での取組への参加促進として、「市大生チャレンジ事業」において、3件の活動（「小さな祈り影絵展2021」、「ONE DREAM 2021 学生プロジェクト」、「リノベーション＋芸術航路－広島市立大学芸術学部有志展－」）に経費補助を行ったほか、地域貢献特定プログラムの科目である「地域課題演習」等において、様々なテーマを設定し、学生が地域に出向いて活動を行った。 ○教育方法等の改善 ・情報科学部において、クォーター制を一部導入し、引き続き、科目のターム（4期制）化を着実に推進した。 ・学内教員のアクティブ・ラーニングに関する事例発表の研修会を開催するなど、教職員のアクティブ・ラーニングに対する理解を			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			深めた。 学修者本位の教育の実現に向け、令和2年度から全学的な取組を開始した教育のデジタル化の一環として、令和3年4月からパソコンの必携化を導入したほか、同年10月から、九州大学及びNTT西日本とのLA（Learning Analytics:データの分析に基づいたより効果的な教育及び学習を実現することを目的とした新しい学問分野）に関する共同トライアルを開始した。この共同トライアルは令和4年度まで実施し、その結果を踏まえて、令和6年度からの本格稼働を目指してLAを含む大学全体の教育のデジタル化を進めていく予定である。 ・平成30年度に策定した成績評価ガイドラインを引き続き運用したほか、教育内容及び教育方法の改善につなげるため、カリキュラムアセスメント等の取組を推進し、現状と課題の把握に努めた。 ・芸術資料館所蔵品のデータ撮影を着実に行ったほか、デジタルアーキビストを新規に採用し、作品画像及び作品情報を整理するシステムの構築、資料のデジタル化及び資料収集に伴う様式の整備に取り組み、所蔵品のデジタルアーカイブ化を大きく進展させた。 以上のように、教育全般について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			
⑴　教育内容の充実 各学部及び研究科における質の高い教育を行うとともに、幅広く深い教養と総合的な判断力を培い、豊かな人間性をかん養するため、各学部及び研究科の枠を越えた幅広い教育の充実を図る。加えて、地方創生に取り組む「地（知）の拠点大学」として、地域との連携・協働により、多様な環境下	⑴　教育内容の充実 **ア　全学共通教育（小項目）** ⑺ 多様な価値観に触れ、多様な視座・研究アプローチを学ぶため、国際学、情報科学及び芸術学という特色ある学部構成を生かし、必修科目として3学部合同ゼミを開設する。	○3学部合同基礎演習の実施、第3期中期計画期間に向けた評価・総括	**小項目評価** ○3学部混成の少人数クラス（1クラス11人～12人）による必修科目「3学部合同基礎演習」（1年次前期）は、コロナ禍の中、担当教員等が効果的な授業となるよう工夫しながらオンラインで実施した。 具体的な講義内容は、第1回にイントロダクションを、第2回から第6回までに文書の読み方及び要約の作り方、レポートの書き方並びにプレゼンテーション及び議論の仕方などのリテラシー教育を中心に行った。このうち第3回に図書館ガイダンスを実施した。第7回から第15回までは、「いちだい知のトライアスロン」事業と連動させ、同事業のスタートアップコースに当たる読書2点、映画鑑賞1点及び美術鑑賞1点を必要条件に、4点以上のレポートの投稿を推奨した。同演習により、学部を超えた学習集団の形成を促進したほか、学生は幅広い教養と自己表現能力を養うことができた。	a	**〔評価理由〕** 全学共通教育内容の充実について優れた取組を実施したと認められることから、「Ａ」と評価した。 〔コメント〕 ○「いちだい知のトライアスロン」事業のウェブサイトは充実していると評価する。「入学前教育」との連携も意欲的な試みであり、効果を期待できる。 ○コロナ禍の中で、「3学部合同基礎演習」及び「いちだい知のトライアスロン」事業な	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
での実践的な教育を推進する。 また、「国際平和文化都市」を都市像とする本市の設立した公立大学法人が設置する大学として、平和に関する教育を積極的に推進するとともに、グローバル化への対応力を育成するための機会の充実を図る。	㈾ 学生が、読書、映画鑑賞及び美術鑑賞を通じて専門分野を越えた幅広い教養を身に付けられるよう、「いちだい知のトライアスロン」事業のより一層の充実を図る。平成33年度までに、「いちだい知のトライアスロン」事業に係る感想レポート及び「おススメコメント（他の学生に本や作品を推薦するという視点で作成するコメントをいう。）」の提出件数を年間2,000件（平成26年度1,012件）にするとともに、附属図書館入館者数を年間90,000人（平成26年度84,672人）にする。	○「いちだい知のトライアスロン」事業の活性化、第3期中期計画期間に向けた評価・総括	講義終了後の学生アンケートでは、令和2年度と比較して概ね変わりなく、肯定的な回答が過半数を占める結果を維持していた。 また、この学生アンケートの結果を基に、3学部合同ゼミワーキンググループにおいて授業の振り返りを行ったほか、令和4年度担当教員を対象に教員説明会（授業説明及び授業事例発表）を開催し、授業の共通理解を図った。 ○読書、映画鑑賞及び美術展観賞を奨励する「いちだい知のトライアスロン」事業については、「3学部合同基礎演習」や入学前教育とも連動させたことにより、感想レポート及び推薦コメント提出件数は第2期中期計画期間中最多の2,886件に達し、目標値（年間2,000件）を上回った。 また令和3年度は、トライアスロンコースを達成した3人の「知の鉄人」（全員4年生）が誕生し、そのうち2周目の鉄人達成者に、優れた成績を挙げたと認め学生顕彰を授与した。 附属図書館の入館者数は、コロナ禍により55,274人にとどまり、目標値（年間90,000人）を下回ったが、電子書籍の利用に関するPRや土曜日開館（令和3年7月～同年9月）の実施など図書館の活性化に努め、入館者数が大きく落ち込んだ前年度と比べ、回復しつつある。 ・附属図書館入館者数 55,274人（令和2年度19,325人） ・学生の図書貸出冊数 15,933冊（令和2年度10,577冊） 【「いちだい知のトライアスロン」事業に関する取組実績】 ・「3学部合同基礎演習」において、WebClassに同事業の説明動画を掲載（閲覧者数延べ515人） ・コメント大賞表彰式の実施 ・オンライン・オープンキャンパスで同事業のPR動画を掲載 ・知の鉄人（12～14代目）表彰式の実施 ・入学前教育での「いちだい知のトライアスロン」事業の実施（取組者数102人、投稿件数155件）		ど、特色ある全学共通教育を発展させている。 ○「いちだい知のトライアスロン」事業及び「ランゲージチューター制度」など堅実に行っている。 ○情報科学部学生の第2外国語履修者の減少については放置するべきではないだろう。母国語に加えて、外国語を一つのみならず、少なくとも二つ学習することによって、格段に豊かな言語感覚を持つことができる。	
	㈿ 外国語による実用的・実践的なコミュニケーション能力を向上させるため、授業内容の改善等により、英語及び第2外国語教育の充実を図る。	○英語及び第2外国語教育の充実に係る方策の実施、第3期中期計画期間に向けた英語教育及び第2外国語教育の充実に係る評価・総括	○前年度に引き続きTOEICテストをオンラインに替えて実施するとともに、学部別・入学年度別TOEICスコア分布を検証した。 英語科目のターム化については、クォーター制の導入と併せて検討することとし、令和3年度は、クォーター制を導入した他大学の事例調査（情報収集、インタビュー及び分析等）を行った。 情報科学部対象の「ｅラーニング英語」においては、授業形態を週1回の一斉授業から、毎日、継続して学習する完全自習型に変			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
		○留学生を活用した実践的外国語会話プログラムの実施及び見直し・改善	更した。毎日コンスタントに学習するスタイルに改善させることにより学習効果の更なる向上を図った。 また、情報科学部学生の第2外国語履修者が、令和元年度以降、減少傾向にあることから、学生アンケートを実施し、その結果を踏まえ、令和4年度以降の科目編成の適正化などについて検討することとした。 ○日本人学生と外国人留学生が母語を教え合う「ランゲージチューター制度」では、コロナ禍のため、前期はオンラインでレッスンを実施し、感染状況が改善した後期からはオンラインと対面を併用した。コロナ禍により、海外学術交流協定大学からの派遣留学生の受入れがなかったため、外国語チューター（特に需要が多い英語、フランス語及びドイツ語）が少ない状況だった。その結果、活動人数は延べ21人（日本語11人、外国語10人）で、令和2年度と比べ少なかったが、合計478.75時間の制度活用（日本語：204.25時間、ドイツ語：8.25時間、中国語：91.5時間、ハングル：10時間、英語：143.75時間、インドネシア語21時間）があり、活動実績は令和2年度を上回り、一人一人の活動内容は充実したものとなった。 以上のように、「全学共通教育内容の充実」について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			
学部専門教育では、各学部の理念と専門分野の特色に対応した効果的な専門教育を行う。	**<u>イ　学部専門教育（小項目）</u>** 学生の多様化に対応するとともに、社会で通用する実践的な能力を身に付けた学生を養成するため、学部専門教育の充実に取り組む。 ⑺ 国際学部においては、専門性と学際性を両立させるため、教育課程の充実及び専門領域認定（国際学部の五つのプログラム科目群のうち、一つの科目群から36単位以上を履修した場合、当該プロ	○専門性と学際性を両立させるための教育課程の充実及び専門領域認定の仕組みの見直しの評価・総括	**小項目評価** ○国際学部では、専門性と学際性の両立を図るため、教育課程の充実等に次のとおり取り組んだ。 ※新カリキュラム導入3年目、新領域認定の卒業要件化2年目に当たる。 【取組内容】 ・1年次については、令和3年4月のオリエンテーション期間に新入生ガイダンスを実施し、海外留学を促すための追加資料として「留学のすすめ」を配付するとともに、別途、2回の個別履修相談を実施した。また、専門基礎科目「国際研究入門」（1年次前期）について、学修計画と専門領域を効果的に結びつけるため、履修者全員に4年間の学修計画を作成させる指導を行った。 2年次については、専門演習（3年次）の履修に向け、履修登録案内で領域認定について詳細な説明を行った。また、専門	a	**〔評価理由〕** 学部専門教育内容の充実について優れた取組を実施したと認められることから、「Ａ」と評価した。 〔コメント〕 ○情報科学部における教育のデジタル化推進の試み及び芸術学部におけるアートプロジェクト等を通じた学外実践教育の実施などは、学習を活性化する努力が確実に進められていると評価する。	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	グラム領域を専門に履修したことを認定する制度をいう。）の仕組みの見直しに取り組む。		演習希望届の提出の際に、担当教員のアドバイスを受けることを必須とするなど、教員による緊密な個別指導を実施した。 ・海外留学（「国際研究特講Ⅰ・Ⅱ」、「海外短期語学留学」及び「学部派遣海外インターンシップ」）を促すため、前期の「国際研究入門」の一コマを使い留学体験報告会を実施した。また後期には、留学生報告会及び留学相談会を実施した。 「企業インターンシップ」及び「公的機関インターンシップ」の合同報告会を、国際学部インターンシップ報告会として実施した（内容：3人の学生による報告及び外部講師の講演）。 ・ディプロマ・ポリシーに対応した卒業論文評価制度の下、卒業論文発表会を各プログラム（国際政治・平和プログラム、公共政策・NPOプログラム、多文化共生プログラム、国際ビジネスプログラム及び言語・コミュニケーションプログラム）において実施した。また、卒業論文提出時のアンケートにディプロマ・ポリシーの項目に即した設問を追加し、学生によるディプロマ・ポリシー達成度の自己評価のデータ収集を行った。			
	㈾ 情報科学部においては、技術の進展に対応できる基礎教育の充実を図るとともに、グローバル人材の育成等を推進する。	○技術の進展に対応したカリキュラムの実施と評価、改善に向けた検討	○情報科学部では、技術の進展に対応したカリキュラムの実施等に次のとおり取り組んだ。 【取組内容】 ・令和2年度から導入した「イノベーション人材育成プログラム」を含めた新カリキュラムの年次進行に伴い、「批判的創造的思考法」、「情報セキュリティ基礎」及び「モデル化とシミュレーション」を新規開講したほか、「プログラミングⅠ・Ⅱ」の教育内容の刷新、「プログラミングⅡ」及び「線形代数学Ⅱ」における習熟度別クラスの導入を行った。 ICT活用に不可欠なプログラム及び情報科学の基礎となる数学において秀でた能力を伸ばし、社会にイノベーションをもたらし得る人材の育成を図る「イノベーション人材育成プログラム」の受講者を40人程度募集し、70人を超える応募があった。より意欲の高い学生43人を選抜し、令和4年度の高度な教育の提供につなげることができた。 プログラミング教育及び基礎実験については、授業実施後に			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
			聞き取り調査を行い、その効果と課題を検証した。 次期中期計画に向け、地域に根ざした実践型人材の育成を目的として、「産学連携教育」の立上げを検討し、学部専門教育を更に充実（現場における実践的教育の強化）させるための下地を作った。具体的には、科目群の整備、科目内容の設計及び一部企業との試行的な連携教育（卒業研究）を実施した。 ・本学はコロナ禍を契機に教育のデジタル化を推進しており、教育の質を改善する（アクティブ・ラーニングを促進する）ことを目的に、対面授業においてもoVice（オヴィス）などのデジタルツールを積極的に活用し、学生の主体的な学びを促す授業を実施した。また、デジタルツールにおける教育効果を検証するため、共同プロジェクトを実施した。このように、情報科学部が、コロナ禍を踏まえた新しい教育方法の導入において先導的な役割を果たしており、特に優れた取組を行ったと評価している。 教育の質保証及び質向上のため、カリキュラムアセスメント等の実施内容を検討及び設計し、実施したほか、学部3年次を対象としたカリキュラム・コンサルティングも行い、専門科目等の学部教育に対する学生からのフィードバックを得た。			
		○グローバル人材育成のための教育の実施と評価、改善に向けた検討	○情報科学部では、情報科学を駆使して活躍するグローバル人材の育成等に、次のとおり取り組んだ。 【取組内容】 ・情報科学部の英語教育カリキュラムにおける問題点を整理し、改善するため、カリキュラム改革に着手し、改革方針を定めた。令和4年度以降、この方針に従って本格的な改革を進め、学生のスピーキングとライティング能力の向上に向けた授業を検討することとしている。 ・英語能力の底上げを目的として、3年次進級要件に英語科目の単位修得を追加し、能力が備わるまで何度でも授業で学ぶことができるよう、学生が継続的に英語学習できる環境を整えた。 ・英語によるコミュニケーション力の向上のため、外部講師を招き、英語集中講義を実施した。 ・コロナ禍においても英語学習の意欲を維持させるために、TOEICのオンライン試験によるスコアでも進級要件を満たせるよう			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	㈶ 芸術学部においては、創作工房及びスタジオを活用した実習科目の導入等により、学生の創作活動の幅を広げるための教育内容の充実を図る。	○創作工房及びスタジオの活用、アートプロジェクト等による学外での実践的教育の実施	にルールを変更した。 ○芸術学部では、創作工房等の活用やアートプロジェクト等の実践的教育の実施に次のとおり取り組んだ。 【取組内容】 ・シルクスクリーン用乾燥機や電気釜、電気炉、七宝電気炉等の修繕を行った。 ・伝統技術や地域協働について実践的に学ぶため、東広島市の地場産業である広島仏壇の調査や伝統工芸士2人による講話及び実演を実施した。 「マツダ・広島市立大学芸術学部共創ゼミ」では、「弥山霊火堂 消えずの火 灯火台デザイン」をテーマに、各分野の学生15人がクレイモデルの作品制作に取り組んだ。最終的に、学生8人が本制作に取り組み、その完成作品についてマツダ株式会社本社でプレゼンテーションを行った。 広島市中区役所と連携して取り組んでいる「基町プロジェクト」は8年目を迎え、基町資料室の運営を行い、地域の歴史、地域及び建築を学ぶ機会を提供したほか、「Unité（ユニテ：アートギャラリー）」及び「Make（メイク：工房）」等において、学生が初めて学外で行う作品展示及び販売体験を中心に発表活動を支援した。また、「基町写真展2022」や写真展「明田弘司、と基町」、基町小学校との連携事業「基町小学校創立50周年記念事業写真展」などの準備にも学生が参加した。年間を通じて延べ233人の学生が基町を訪れ、学び、表現活動を行うなど実践的教育を行った。 ・教育の質保証及び質向上のため、カリキュラムアセスメント等の実施内容を検討及び設計し、実施したほか、卒業予定者を対象としたカリキュラム・コンサルティングも行い、全学共通系科目、外国語系科目及び専門科目等の教育並びに学生生活全般に対する学生からのフィードバックを得た。			
	㈷ 大学教育の質を担保するため、英語、数学等のリメディアル教育（大学教育を受ける前提となる基礎的な知識等を補う教育をいう。）を実施する。	○リメディアル教育の実施、第3期中期計画期間に向けたリメディアル教育の評価・総括	○リメディアル教育として「サポート教室」を次のとおり実施した。 【取組実績】 (英語) 内容：文法及び文法項目のTOEICリーディング問題への応用 実施期間：前期 令和3年5月12日～同年7月15日（週1コマ×10週）、後期 令和3年10月18日～令和4年1月17日			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
			（週1コマ×10週） 対象学生：概ねTOEICスコア350点以下の者で募集に応じた者（全学部対象） 受講人数：26人 (数学) 内容：情報科学部1年前期で必修科目となっている「解析学Ⅰ」及び「線形代数学Ⅰ」の単位を修得するために必須である高等学校数学 実施期間：令和3年10月8日～令和4年1月21日（週1コマ×13週） 対象学生：情報科学部1年～3年のうち「解析学Ⅰ」又は「線形代数学Ⅰ」の単位未修得者で募集に応じた者 受講人数：48人 (素描(そびょう)) 内容：基本スキル向上のための実技指導 実施期間：令和3年12月21日～同月23日（5コマ×3日間） 対象学生：前期の実習の成績を基に選出した芸術学部日本画専攻の1年ほか希望者 受講人数：3人 (デッサン) 内容：基本スキル向上のための実技指導 実施期間：令和3年12月21日～同月24日（4コマ×3日間、24日のみ3コマ） 対象学生：前期の実習の成績を基に選出した芸術学部の1年ほか希望者 受講人数：16人 (塑造(そぞう)) 内容：基本スキル向上のための実技指導 実施期間：令和3年12月22日～同月24日（5コマ×3日間） 対象学生：前期の実習の成績を基に選出した芸術学部彫刻専攻の学生ほか希望者 受講人数：5人 受講者アンケートを行った結果、概ね好評を得ていた。数学については、受講を継続できない傾向が依然として見受けられたため、継続できなかった学生に対してもアンケートを実施した。その結果を踏まえた改善策を検討することとしている。 以上のように、「学部専門教育内容の充実」について優れた取組			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			を実施したことから、「a」と評価した。			
大学院教育では、国際学、情報科学、芸術学及び平和学の特色ある研究科及び研究所の構成を生かした個性的な教育を実施し、高度な知識を身に付けさせるとともに、自己の能力を発揮して課題に対応でき、国際社会及び地域の発展に貢献できる研究者及び高度人材を養成する。	**ウ　大学院教育（小項目）** 学生の多様化に対応するとともに、専門分野において優れた研究能力と実践的技能を身に付けた学生を養成するため、大学院教育の充実に取り組む。 (ｱ) 大学院に平和学研究科を新設する。 (ｲ) 国際学研究科においては、文系高度実務者養成のための教育を実施する。 (ｳ) 情報科学研究科においては、社会のニーズを教育へ適切に反映するとともに、社会の変化に対応した人材育成のための教育内容の充実を図る。 (ｴ) 芸術学研究科において	○平和学研究科博士後期課程の新設 ○文系高度実務者養成のための教育の実施に係る評価・総括 ○技術の進展に対応したカリキュラムの実施と評価、改善に向けた検討 ○領域横断的な教育の実	小項目評価 ○平和学研究科では、令和3年4月に博士後期課程を新設し、開設初年度に定員を充足するとともに、社会人や外国人留学生などの幅広い人材を受け入れることができた（令和3年4月入学者3人、同年10月入学者1人）。また、博士前期課程（修士課程）については、開設3年目に当たり、着実に入学者を確保できている（令和4年4月入学者4人）。 ○国際学研究科では、文系高度実務者養成に向けて、次の取組を実施した。 ・令和2年度末に作成した「社会人のためのスキルアップ履修モデル」を更新し、大学院ウェブサイトに掲載した。 ・修士論文に代わるリサーチペーパー制度、1年間で学位要件単位を履修できる制度及び社会人リカレント教育としての教員専修免許状取得への需要など、社会人修士1年制（社会人大学院生用の博士前期課程コース）案について情報収集し、課題を整理した。 ○情報科学研究科では、社会のニーズの教育への反映と社会の変化に対応した教育内容の充実のため、次の取組を実施した。 ・令和元年度から本格開講している、社会人向けリカレント教育講座「enPiT-Pro」事業で提供している一部科目を、大学院科目「情報科学特別講義」に試験的に取り込み、大学院教育の充実を図った。大学院生15人が受講し、好評を得た。 ・ハノーバー専科大学（ドイツ）とのダブルディグリープログラム（双方の大学で学位取得を可能とする制度）について、本学から1人派遣した。 ・大学院教育でも「産学連携教育」の立上げを検討し、大学院専門教育を更に充実（現場における実践的教育の強化）させるための下地を作った。具体的には、自ら課題を選定する「自主プロジェクト演習」を「プロジェクト演習」に改称し、地域企業及び自治体の課題を情報通信技術で解決する課題を設定し、プロジェクトを計画及び実施する授業内容に変更した。 ・一部の大学院科目において、試行的に企業と連携講義を実施した。 ○芸術学研究科では、領域横断的な教育及び実践的教育を次のとお	a	〔評価理由〕 大学院教育内容の充実について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○博士後期課程における定員の充足は容易ではなく、そのため定員の充足が達成できないことは広島市立大学に限ったことではないことは承知の上で、定員未充足の研究科には、その充足に向けてこれまで以上に前向きな取組を期待したい。 ○各研究科独自の取組を充実している。 ○平和学研究科で、博士後期課程の開設初年度に定員を充足できたのは良かった。ダブルディグリープログラムでは、実際に取得者を出すなどの成果が欲しい。	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	は、学生の創作活動の幅を広げるための領域横断的な教育に取り組むとともに、地域展開型の芸術プロジェクトへの参加等による実践的な教育を推進する。	施、アートプロジェクト・展覧会公募、地域展開型の芸術プロジェクトへの参加等を通じた実践的教育の推進	り実施した。 ・専門領域外の教員を副指導教員として申請できる制度並びに芸術学研究科及び情報科学研究科の教員が所属の枠を超えて相互に指導する研究アドバイザー制度を、引き続き実施した。 各研究分野が行う講評会、成果発表会及び特別講義などを公開制で実施した。学部の他分野の教員及び学生が参加し、専門的な知識に基づく指導や分野を超えた意見交換が活発に行われた。 ・令和3年度の地域展開型の芸術プロジェクトは、香川県小豆島町との連携による「三都半島アートプロジェクト2021」のほか、COC＋アートプロジェクトの後継事業として、広島市、呉市、東広島市、廿日市市及び大竹市で、9プロジェクトを実施した（コロナ禍のため一つのプロジェクトは中止）。参加した大学院生17人は、それぞれのプロジェクトにおいて主導的役割を果たし、実践的教育面からも創作能力及びマネジメント能力の向上が見受けられた。 「マツダ・広島市立大学芸術学部共創ゼミ」では、大学院生2人が受講し、より専門性を重視した完成度の高い作品を制作するとともに、評価の高いプレゼンテーションを行った。			
	㈾ 国際学、情報科学、芸術学及び平和学の特色ある研究科及び研究所の構成を生かした科目の新設等により、学際的な教育を推進する。	○第3期中期計画期間に向けた学際的教育推進の検討	○次期中期計画に向けて、執行部において学際的教育の実施案の検討を行った。 以上のように、「大学院教育内容の充実」について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			
	エ　特色ある教育（小項目） ㈺ 豊かな人間性と国際性を身に付けた人材を育成するため、国際学生寮を活用した教育プログラムの開発・実施に取り組む。	○国際学生寮を活用した教育プログラムの実施、第3期中期計画期間に向けた教育プログラムの評価・総括	小項目評価 ○国際学生寮を活用した教育プログラムの実施並びに次期中期計画期間に向けた教育プログラムの評価及び総括に次のとおり取り組んだ。 ◎国際学生寮「さくら」では、日本人学生と外国人留学生との寮における共同生活そのものを、語学、異文化理解及び対人関係の構築等を学ぶ教育プログラムとして位置付け、学生役職者が中心となり入寮者全員で寮運営に取り組んだ。コロナ禍により、外国人学生の来日中止又は延期の状況が続き、令和3年度の入寮者は日本人学生34人及び外国人学生13人だった（令和4	a	〔評価理由〕 特色ある教育内容の充実について優れた取組を実施したと認められることから、「Ａ」と評価した。 〔コメント〕 ○ロシアによるウクライナ侵攻を受け、学生の平和への関心は高まっていると思われる。平和教育については、大学な	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			年3月末時点で外国人学生8人が入寮中）。毎月開催するレジデント会議には必ず教職員が参加し、学生の自主性を尊重しつつ、助言や指導を行った。 また、令和4年度の学生役職者の募集及び選考を行い、16人の新学生役職者を決定した。学生主体による寮生活（教育プログラム）の改善に資するよう、新学生役職者に対して次の研修プログラムを実施した。 【研修内容】 ・日本赤十字社職員によるAED講習 ・新年度寮運営の準備 ・学生役職者オンライン交流会 ・積極的な英語学習及び異文化交流について ・コミュニケーション力向上のための教育プログラム講習 ◎国際学生寮を活用し、入寮者以外の全学生を対象とした外国語を学ぶ教育プログラム「さくらでミニ留学」を実施した（コロナ禍により日帰りのプログラムで実施）。令和3年度は、学生からのニーズの高い中国語、韓国語及び初級英語のメニューを増やした。参加者アンケートでは、回答した学生全員から「とても有意義だった」又は「やや有意義だった」との回答が得られ、好評を得た。 【プログラム内容】 ・第2外国語（韓国語）教育プログラム（参加者数21人） ・初級者向け英語教育プログラム（参加者数22人） ・第2外国語（中国語）教育プログラム（本学の国際交流サークルHIFが企画、参加者数8人） ・初級者向け英語教育プログラム（参加者数12人） ・中・上級者以上向け英語教育プログラム（参加者数11人）		らではの、総合的な学知の提供を期待したい。 ○国際学生寮「さくら」を活用し、人材育成を大いに進めている。 ○特色ある国際学生寮「さくら」の利用がコロナの影響を受けて低迷しているのが残念である。 ○「広島市立大学塾」では、沖縄研修を実施できなかったことは残念であったが、それに代替するフィールドワークなどの実施によって、充実したプログラムを維持できたと評価する。 ○「広島市立大学塾」の実施、「地域貢献特定プログラム」、夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」の実施など、地域貢献及び地域交流が堅実に行われている。 ○「地域課題演習」は、複雑な地域の課題を学生に直視させる問題設定を行っている。 ○夏季集中講座「HIROSHIMA and PEACE」の実施についてはオンライン開催とするなど工夫がみられる。本講座の一層の改善に向け、参加者からの評価なども活用されたい。	
	㈾ 社会に貢献するリーダー人材を育成するため、少数の学生を対象に課外教育プログラムを実施する「広島市立大学塾」（仮称）を創設する。	○「広島市立大学塾」の実施・改善、第3期中期計画期間に向けた教育プログラムの評価・総括	○前期履修登録期間に合わせて令和3年4月1日から同月28日まで塾生の募集を行った。例年に比べ多くの応募があり、24人の応募者のうち、選考の結果、17人を合格とした。 教育プログラムは、令和3年5月12日の入塾式から令和4年2月21日の最後のプログラムまで、計26回実施した。 視察体験プログラムの沖縄研修については、広島県のまん延防止等重点措置の適用期間が延長されたことを踏まえ、やむを得ず中止としたが、令和4年2月21日の事前学習の発表会は予定どおり実施した。			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			プログラムの内容はこれまで実施してきたものを基本としつつ、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館及び回天記念館（山口県周南市）等の見学並びにゲスト講師を迎えての広島平和記念公園及び広島城周辺フィールドワークなど、現場で学ぶプログラムを充実させるとともに、「被爆体験証言を考える」及び「原発事故から見えてきたヒロシマ」などの新たなテーマのプログラムも加えた。さらに、附属図書館と連携し、「広島市立大学塾」のプログラムとして、新たにビブリオバトル（本の紹介コミュニケーションゲーム）を実施した。			
	㈾ 地方創生に取り組む「地（知）の拠点大学」として、地域に愛着・誇りを持ち、その発展に貢献する人材を育成するための教育カリキュラムの充実を図る。	○地域貢献特定プログラムの実施、評価・改善	○地域貢献特定プログラムの実施、評価及び改善に次のとおり取り組んだ。 ・「地域課題演習」及び「地域実践演習」も含めて、地域貢献特定プログラム科目を開講した。 同プログラムを構成する科目の履修者は、前年度を上回る1,379人だった。また、「ひろしま地域リーダー」（同プログラム履修者の中から、地域貢献に関するテーマで卒業論文・研究・制作の単位を修得した者）に例年並みの18人を認定した。認定者を増やす取組を検討するため、既に卒業論文を除いた認定要件を満たしている学生に対し、アンケート調査を行った。 ・地域志向教育特別委員会において、今後の地域志向教育の在り方について議論を行った。正課及び正課外での学びの接続や補完を意識した地域志向教育を体系化させるとともに、広島広域都市圏を対象にしたマイクロトリップ及びワーキングホリデー等の提供を行い、学生の地域体験を総合的に推進及びサポートするプログラム「いちだい地域体験トライアル（仮称）」の検討を行った。			
	㈿ 情報科学部及び情報科学研究科においては、他大学、医療機関、企業等学外機関との連携を推進し、情報科学、医学及び工学の知識を有した優秀な人材の育成を図る。	○医用情報科学分野におけるカリキュラムの実施、見直し・改善、第3期中期計画期間に向けた医用情報科学分野における人材育成カリキュラムの評価・総括	○「臨床情報工学プログラム」において他大学で提供されている医学系講義に相当するものとして、「医科学概論Ⅰ・Ⅱ」をターム科目として開講した（学部科目のターム化に対応）。また、令和2年度に新設した実習科目「医用情報科学のための病院実習」は、コロナ禍により不開講とした。なお、令和4年度の開講に向け、広島市民病院副院長（本学客員教授）と意見交換を行った。			
	㈹ 夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」の講義内容等のより一層	○夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」の実施、見直し・改善	○夏期集中講座「HIROSHIMA and PEACE」は、コロナ禍により、令和2年度に引き続きオンライン講座としたが、単発講座から、4回（令和3年7月17日、24日、31日及び同年8月7日）にわたる連続講座に拡大し、プログラムを充実した。海外11か国及び国内7大学			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	の充実を図る。		から全体で49人の参加があった（本学学生参加者数7人）。実施後のアンケートの結果では、「大変に満足した」が80%又は「満足した」が20%と好評を得た。 ウェブページのアップデート作業を効率的に行うため、国際学部オリジナルウェブサイトに「HIROSHIMA and PEACE」のページを組み込むとともに、同ウェブページをリニューアルし、情報発信の強化に努めた。 来広及び対面での講座を再開する際には、ディスカッションなど参加者間の交流に重点を置いた相互交流型講義で実施することとしており、それに向けて、取得単位数を従来の3単位から2単位とすることを決定した。これにより、受入日数が短縮され、ホストファミリーの確保が容易になると見込んでいる。なお、従来の方法による実施は、コロナ禍により海外渡航の見通しが立たなかったことから令和5年度まで延期とした。			
	㈮ 平和科目の必修化等により、平和関連教育の充実を図る。	○平和関連教育の実施、第3期中期計画期間に向けた平和関連教育の充実に係る評価・総括	○平成28年度に新規開講した「国際化時代の平和」を含む5科目を継続して開講したほか、次期中期計画に向けて、学部総合共通科目及び大学院全研究科共通科目における平和科目について振返りと検討を行った。 新規開設科目の具体化については、「広島を歩く（仮称）」の参考とするため、令和3年6月に広島平和記念資料館及び国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を見学し、同年8月に広島平和記念公園及び広島城周辺のフィールドワークに参加して、情報収集を行った。			
	㈯ 学生が世界又は地域で活躍する人材と交流する機会の充実を図るため、外部講師を招いた講演会、特別講義等の開催に取り組む。	○外部講師を招いた講演会や特別講義等の開催	○学生が世界及び地域で活躍する人材と交流する機会として、「グローバル人材育成講演会」の開催や総合科目「地域再生入門」の開講のほか、各学部等において、外部講師を招いた講演会又は特別講義などをオンライン等により開催した（国際学部10回、情報科学部8回、芸術学部38回）。 【主な講演会等】 ・「世界とつながる折紙ー折紙と文化、数学、アート、工学」 講師：三谷純（筑波大学システム情報系教授） ・「アートによる地域の再生～直島及び中国農村の事例～」 講師：福武總一郎（株式会社ベネッセホールディングス名誉顧問） ・「情報爆発社会と自由な表現・民主主義の危機」 講師：津田大介（ジャーナリスト）			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	㈥ 学生の成長につながる地域での取組へ学生の参加を促す。	○地域での取組への学生の参加促進	・「200万人広島広域都市圏構想」 講師：舟津好文（広島市広域都市圏推進課課長補佐） ・「中国山地の現状と未来を拓く取組」 講師：安藤周治（NPO法人ひろしまね理事長） ・「地域で生きる豊かさ」 講師：南澤克彦（元安芸高田市地域おこし協力隊） ・「マツダスタジアムの魅力と都心の活性化」 講師：日高洋（元広島市役所経済観光局長） ・「しまなみ海道サイクリングが育んだ地域の好循環」 講師：合田省一郎（一般社団法人しまなみジャパン専務理事） ・「空き家の再生と移住」 講師：新田悟朗（NPO法人尾道空き家再生プロジェクト専務理事） ・「学びを入口に地域と関わる」 講師：平尾順平（NPO法人ひろしまジン大学代表理事・学長） ・「ジャーナリストから見た地域社会」 講師：北村浩司（株式会社中国新聞社常務取締役・編集制作本部長） ・「デザインの視点から広島の再生を考える」 講師：弥中敏和（株式会社GKデザイン総研広島代表取締役社長） ・「QPMIサイクル～あらゆるイノベーションは、たった一人の『熱』から生まれる。～」 講師： 高橋修一郎（株式会社リバネス代表取締役社長） ○学生の成長につながる地域での取組への参加促進を図り、地域での活動を通じた学生の能動的な学びを支援するため、次の取組を実施した。 ・学生の社会貢献活動に対して1件当たり15万円を限度に事業費を支援する「市大生チャレンジ事業」において、「小さな祈り影絵展2021」、「ONE DREAM 2021 学生プロジェクト」及び「リノベーション＋芸術航路－広島市立大学芸術学部有志展－」の3件の活動に経費補助を行った。 ・東日本大震災を契機として発足した公立大学学生ネットワーク LINKtopos主催の「全国公立大学学生大会 LINKtopos 2021」への参加を呼びかけ、学生4人が参加した。			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			・そのほか、ひろしま市議会だより創刊300号記念特集記事「市民を惹きつける市議会広報とは？」の座談会、THE OUTLETS HIROSHIMAの「未来デザインプロジェクト」の制服デザイン募集、西日本高速道路サービス・ホールディングス株式会社中国支社の企画「瀬戸内の風マルシェ」のお菓子パッケージデザイン募集など、学生の学外企画への参加をサポートした。 ・地域貢献特定プログラムの科目である「地域課題演習」等において、「情報科学技術を使った広島観光の魅力分析」、「竹原市をPRする観光映像を作る」及び「空き家再生から尾道の魅力と課題を学ぶ」など様々なテーマを設定し、学生が地域に出向いて活動を行った（「地域課題演習」履修者数37人）。 以上のように、「国際社会及び地域の第一線等で活躍する人材の育成、平和関連教育など特色ある教育内容の充実」について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			
⑵　教育方法等の改善 各学部及び研究科の教育目標を実現し、学生にとって魅力ある教育を提供するため、授業内容及び授業方法の改善を図るとともに、必要な教育環境を整備する。 また、学生が自主的かつ主体的に学習に取り組むことができるよう、学習環境を整備する。	**⑵　教育方法等の改善（小項目）** ア　教育効果の向上及び短期留学、インターンシップ、ボランティア活動等学外での学びの活性化のため、クォーター制の一部導入に取り組む。 イ　学生の学びを能動的かつ自律的なものにするための教育を推進する。 ウ　GPA（Grade Point Average：履修科目ごとの成績に評点を付けて全科目の平均値を	○クォーター制の一部導入、第3期中期計画期間に向けたクォーター制一部導入の評価・総括 ○アクティブ・ラーニングの推進 ○成績評価ガイドラインの運用（点検）、GPAの分析及び教育内容・	小項目評価 ○情報科学部において、クォーター制を一部導入し、引き続き、科目のターム（4期制）化を着実に推進した。また、「学生HANDBOOK」への表記について、ターム科目は全て開講タームを記載することで、学生へのターム化の意識の醸成を図った。更なる導入に向け、クォーター制を導入した他大学の事例の調査活動（情報収集、分析及びインタビューなど）を行った。 ○学内教員のアクティブ・ラーニングに関する事例発表の研修会を開催した（参加者数77人）。また、LAをテーマに外部講師を招いてセミナーを開催し（参加者数99人）、教職員のアクティブ・ラーニングに対する理解を深めた。 学修者本位の教育の実現に向け、令和2年度から全学的な取組を開始した教育のデジタル化の一環として、令和3年4月からパソコンの必携化を導入したほか、同年10月から、九州大学及びNTT西日本とのLAに関する共同トライアルを開始した。この共同トライアルは令和4年度まで実施し、その結果を踏まえて、令和6年度からの本格稼働を目指してLAを含む大学全体の教育のデジタル化を進めていく予定である。 ○成績評価ガイドラインの運用（点検）、GPAの分析及び教育内容・教育方法の改善に次のとおり取り組んだ。 ・平成30年度に策定した成績評価ガイドラインを引き続き運用	b	〔評価理由〕 教育方法等の改善のための取組を計画どおり着実に実施したと認められることから、「Ｂ」と評価した。 〔コメント〕 ○教育改革の理念は、その実現を可能にする教員サイドのFDのみならず、施設の整備が伴わなければならないことには留意されたい。 ○LAの試行は意欲的なものであり、その成果を注視したい。	B

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	算出する成績評価システムをいう。）の分析・活用等により、教育内容及び教育方法の改善に取り組む。	教育方法の改善	し、成績評価基準の明示など、高等教育の負担軽減制度に係る機関要件の確認申請に対応できた。また、ガイドラインで対象とする科目の成績分布について、教務委員会及び内部質保証委員会が連携し、令和2年度科目を令和元年度と比較できる分析資料にまとめ、全学部及び研究科で共有した。あわせて、教育内容及び教育方法の改善につなげるため、カリキュラムアセスメント等の取組を推進し、現状と課題の把握に努めた。 ・授業アンケートを実施し、教員においては、その結果を基に授業の振返りを行うとともに、来年度に向けて、授業改善に取り組んだ。 【令和3年度前期】 アンケート対象者数:17,443人 回答者数:12,363人 回答率:70.9% 受講者平均値:4.1点（5点満点） 【令和3年度後期】 アンケート対象者数:15,625人 回答者数:9,760人 回答率:62.5% 受講者平均値:4.1点（5点満点）			
	エ　生涯学習、リメディアル教育等を効果的に実施するため、「総合教育センター」（仮称）の設置に向けて取り組む。	○附属施設等の見直しの検討	○次期中期計画を着実に実施するため、附属施設等について、必要な機能及び役割を検討した。			
	オ　芸術資料館所蔵品のデータベース化を推進するとともに、所蔵品の多様な活用を図る。	○高精細記録の実施、所蔵品の多様な活用に向けたPR及び展開	○高精細記録の実施、所蔵品の多様な活用に向けたPR及び展開に次のとおり取り組んだ。 ・芸術資料館所蔵品47点のデータ撮影（8,000万画素以上）を着実に行ったほか、デジタルアーキビストを新規に採用し、作品画像及び作品情報を整理するシステムの構築、資料のデジタル化及び資料収集に伴う様式の整備に取り組み、所蔵品のデジタルアーカイブ化を大きく進展させた。 ・芸術資料館においては、7件の企画展を開催した（コロナ禍のため2件中止）。令和3年度は、所蔵品を活用した企画展として、「新収蔵作品展2021 Ⅰ」及び「収蔵作品展 花園 Jardin －花と鳥－」を実施した。 また、芸術学部専門科目「造形実習ⅢA」（デザイン工芸学科立体造形分野）及び学芸員資格取得関係科目「博物館実習」の授業で、所蔵品を学習に活用したほか、古美術の調査研究を行う			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
			授業（コロナ禍で中止した古美術研究旅行の代替授業）にも題材として活用した。 収蔵作品目録を小写真入りの冊子として作成した。 以上のように、「教育方法等の改善」のための取組を計画どおり着実に実施したことから、「ｂ」と評価した。			
2　学生の確保及び支援に関する目標	**2　学生の確保と支援（大項目）**		**大項目評価** 〇意欲ある優秀な学生の確保 ・令和元年度に全学的な検討を行った新入試の制度の下、各学部で選抜実施要領及び評価基準を定め、アドミッション・ポリシーに応じた入学者選抜（総合型選抜、学校推薦型選抜及び一般選抜等）を実施した。 早期に入学が決定する総合型選抜及び学校推薦型選抜による入学予定者に対し、学習意欲の維持及び継続並びに入学後の本学教育への円滑な移行を目的に、「いちだい知のトライアスロン」事業や英語eラーニング等の入学前教育を行った。令和3年度は、情報科学部において、研究室インターンを新たに実施した。 ・各研究科において、進学説明会を実施した。 これまでの、一般入試及び定員に満たない場合に行う二次試験という入試区分について、一般入試を2回行う形（第1回試験及び第2回試験）に変更し、出願しやすいように改善した。また、受験方法についても見直しを行い、推薦入試及び一般入試第2回試験をオンライン化した。 ・「広島市立大学広報戦略」に基づき、大学案内の発行及び広島バスセンターでのポスター掲示等の広報活動を行った。また、本学の知名度及びブランドイメージの向上を図るため、コンペにより選考した本学学生の優秀作品2点により動画を制作し、テレビコマーシャル及びYouTubeでのメディア広告を初めての試みとして実施した。 オープンキャンパスについては、コロナ禍により、令和2年度に引き続き、動画コンテンツを配信した。また、オープンキャンパスにおける初めての試みとして令和3年8月21日及び同年9月4日にライブ開催でのプログラムを実施した。 〇学習環境等の整備、キャリア形成に関する支援等による学生への支援 ・コロナ禍により、令和2年度と同様に参加者を2グループに分け、全プログラムを入れ替える形で「3学部合同新入生オリエンテー	a	〔評価理由〕 学生の確保と支援の全般について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
			ション」を2回実施した。新たな取組として、先輩学生（学生ICTサポーター）36人が、担当するクラスに分かれてオリエンテーリングに同行した。実施後アンケートの結果、「満足」又は「まあまあ満足」との回答が89.7%と、満足度の高い評価を得た。 ・ピア・サポーター（学生17人）を中心に、ピア・サポート活動の運営を行ったほか、日本人学生及び外国人留学生が母語をお互いに教え合う「ランゲージチューター制度」及び新入生のパソコン等の相談に対応する「学生ICTサポーター制度」等を実施し、学生同士で支援を行う輪を広げることができた。 ・コロナ禍により経済的に困窮する学生を支えるため、本学独自の応急奨学金の給付、大学内の食堂及び売店で使用可能な食券の配付並びに食品等の現物支給を行った。また、家計が急変した学生を対象とする後期授業料の減免を行った。 ・附属図書館では、担当教員の協力を得て、図書の除架及びオンラインブック・ハンティングによる選書を行い、蔵書を充実させた。また、広島県立図書館の図書を自由に予約し、受取及び返却を行うことができるよう、広島県立図書館との連携を開始した。さらに、次期中期計画期間における学修及び教育支援機能並びに研究活動支援機能の強化、地域貢献並びに基盤整備についての附属図書館の将来像（基本目標及び取組事項）の検討を進めた。語学センターでは、課外英語学習プログラム等をオンラインで実施した。情報処理センターでは、情報科学部4年生及び情報科学研究科大学院生をティーチングアシスタントとして雇用し、学生のパソコン等に関する相談支援体制を整備するとともに、ネットワーク講習会を実施し、パソコン必携化をサポートした。 ・キャリア形成支援のため、キャリア教育関連科目の実施、メールマガジン「キャリア通信」の配信並びに学内情報システムを活用したセミナー及び行事に関する情報発信などを行ったほか、企業研究セミナーの開催など学生と企業のマッチング機会の確保に努めた。また、アントレプレナーシップを育む取組などを新たに開始した。インターンシップ等の支援については、インターンシップの募集情報の発信やマナー研修などを実施した。インターンシップ参加者数は目標値（年間63人）を超える84人だった。 以上のように、学生の確保と支援の全般について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
⑴　学生の確保 受験生の動向を踏まえた効果的な入試広報を展開するとともに、国内外からの意欲のある優秀な学生の確保に向けた取組を積極的に進める。	⑴　学生の確保（小項目） ア　教育内容の充実等により受験生への魅力を高め、アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）に応じた入学者選抜を実施することにより、意欲のある優秀な学生を確保する。	○新入試の実施、評価	小項目評価 ○令和元年度に全学的な検討を行った新入試の制度の下、各学部で選抜実施要領及び評価基準を定め、アドミッション・ポリシーに応じた入学者選抜（総合型選抜、学校推薦型選抜及び一般選抜等）を実施した。コロナ禍により、受験生及び保護者向けの進学相談会のオンラインによる実施並びに一般選抜における感染症対策に伴う試験実施上の配慮の検討及び公表などの対応を行ったほか、令和4年度大学入学者選抜における個別学力検査の追試験等にも特別に対応した。 新入試の実施に伴い、早期に入学が決定する総合型選抜及び学校推薦型選抜による入学予定者に対し、学習意欲の維持及び継続並びに入学後の本学教育への円滑な移行を目的に、次の入学前教育を行った。令和3年度は、情報科学部において研究室インターンを新たに実施した。 3学部共通：「いちだい知のトライアスロン」事業及び英語eラーニング 情報科学部：数学（問題集）及び研究室インターン 芸術学部：実技課題	a	〔評価理由〕 意欲ある優秀な学生の確保について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○入試の多様化に伴い早期に入学が決定する入学予定者について、その学習意欲を減退させないために、入学前教育として「いちだい知のトライアスロン」事業を活用することは妙案である。 ○様々な対応を実施し、優秀な学部生及び大学院生の確保を図っている。ただし、国際学研究科の博士前期・後期課程及び情報科学研究科の博士後期課程の定員が未充足である。特に、前期課程の定員を満たすことは急務である。 ○オンライン・オープンキャンパスには創意工夫がみられる。 ○大学院生の確保に苦戦しているが、健闘している。広報も健闘しているが、特徴をもっとアピールしても良い。ラッピングしたマイクロバスを新たに導入したことなども面白い。	A
	イ　長期履修制度、海外学術交流協定大学推薦入試制度等を活用し、国内外から意欲のある優秀な大学院生の受入れを行う。	○意欲のある優秀な大学院生の受入れに向けた改革の評価と改善	○各研究科において、意欲のある優秀な大学院生の受入れに向けた取組を実施した。 ・国際学研究科では、受験希望者が必要な情報にアクセスしやすくするため、本学ウェブサイトの入試情報ページに、「入試の区分と募集要項」及び「よくある質問&回答」を追加した。 日本語が堪能ではない外国人研究生が、英語版の募集要項などの入試情報にアクセスしやすくするため、本学ウェブサイト並びに国際学部及び国際学研究科オリジナルサイトを改善した。 外国人研究生に対して、指導教員を通じて、海外学術交流協定大学推薦入試の制度（書類選考のみ）及び英語版の募集要項へのアクセス方法について情報提供を行った。 平成30年度から実施している北陸大学での大学院進学説明会を今年度も本学教員が実施した。対面6人及びオンライン6人の参加があり、このうち4人が進学に意欲を示した。 コロナ禍により入国制限が続く中、海外学術交流協定大学から2人の外国人留学生（国費留学生）を外国人研究生として受け入れた。うち1人は令和4年4月に前期課程に進学し、残る1人は令和4年6月実施予定の海外学術交流協定大学推薦入試の枠で博士			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			前期課程に受験予定である。 大学院進学ガイダンス（博士前期課程推薦入試説明会）を3日（令和3年4月26日～同月28日）実施し、内部進学の促進にも取り組んだ。 ・情報科学研究科では、「enPiT-Pro」事業から派生した、社会人教育プログラム（地元企業の方を対象）を受講した社会人が、本学大学院に進学した場合に、履修証明を前提に、入学前に受講した科目を単位認定する検討を進めた。 これまでの、一般入試及び定員に満たない場合に行う二次試験という入試区分について、一般入試を2回行う形（第1回試験及び第2回試験）に変更し、出願しやすいように改善した。また、受験方法についても見直しを行い、推薦入試及び一般入試第2回試験をオンライン化した。 本学創設以来、受験実績のない海外学術交流協定大学推薦入試の募集を停止した。その代わりとして、意欲ある優秀な留学生の受入れにつなげるため、海外学術交流協定大学に一般の推薦入試及び第2回試験について積極的に広報を行った。 コロナ禍を踏まえ、特例的にTOEIC IPテスト（オンライン方式）のスコアレポートを出願書類として認めることとした。 意欲のある優秀な大学院生の受入れに向け、高専訪問を本格化した。令和3年11月から同年12月にかけて大島商船、徳山、宇部、呉、広島商船、松江、米子、香川、弓削商船及び新居浜の各高専を直接訪問し、積極的な入試広報を行った。このうち、徳山高専の専攻科生から受験の意向があるなど成果を挙げつつある。 ・芸術学研究科では、学部3年次及び大学院博士前期課程1年次を対象としたオンライン進路説明会を行った。また、対面による進路相談の際に、大学院での創作研究についての相談機会も設けることで、進学の意識付けと内部進学の促進を図った。 ・平和学研究科では、広島平和研究所オリジナルサイトを活気あるものとするため、活動日誌をはじめ、適宜、更新を行った。 進学説明会を2回、オンラインで実施し、国内に加え、中国、韓国及びアメリカ等から学生及び社会人の参加があった（令和3年7月実施時の参加者数16人、同年11月実施時の参加者数12人）。			
	ウ　学部の特色・魅力を受験生及び保護者に分かりやす	○広報コンテンツの作成及び発信、広報戦略に	○学部の特色・魅力を受験生及び保護者に分かりやすく伝える広報等を推進するため、次の取組を実施した。			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	く伝える広報、地域性を考慮した戦略的広報に取り組む。	基づいた広報の実施、広報戦略の総括と見直し	・「広島市立大学広報戦略」に基づく広報活動を推進するとともに、同広報戦略に基づく広報の評価及び見直しの検討を行った。 教職員を対象としたアンケート結果等も参考にし、「大学案内2022」を発行した。 令和4年度に作成する大学案内について、本学の魅力、教育内容の特徴及び強みなどのアピールポイントを中心に掲載する内容にリニューアルすることとし、その仕様を検討し、公募型プロポーザル方式により委託業者を決定した。 オンライン・オープンキャンパス（令和3年8月）や芸術学部卒業・修了作品展（令和4年2月）の告知に加え、本学の知名度及びブランドイメージ向上を図ることを目的に、広島バスセンターに本学教職員がデザインして作成したポスターを掲示した。 学生及び教職員の地域貢献等の活動の活性化並びに本学の知名度向上及びイメージアップを目的に、芸術学部学生がデザインし、ラッピングしたマイクロバスを新たに導入し、運用を開始した。 本学の知名度とブランドイメージの向上を図るため、コンペにより選考した本学学生の優秀作品2点により動画を制作し、テレビコマーシャル及びYouTubeでのメディア広告を初めての試みとして実施した。 ブランドイメージ・ロイヤリティの向上を図ることを目的として、芸術学部学生による広島・宮島ろくろの技術及び拭き漆の技法を用いた小皿並びにコミュニケーションマークをデザインに取り入れたジュートバッグを制作した。 本学学生出演のラジオ放送及び本学ウェブサイト等での情報発信を実施した。 コロナ禍により、令和2年度に引き続き、オープンキャンパスをオンラインで実施し、STEP1（令和3年6月28日）、STEP2（令和3年8月19日）として主に動画コンテンツを配信した。また、オープンキャンパスにおける初めての試みとして、ライブ開催でのプログラム（令和3年8月21日及び同年9月4日）を実施した。各学部等において、工夫を凝らしたコンテンツを準備し、1,147人の参加登録があった。 ・国際学部では、オンライン・オープンキャンパス、オンライン進路指導教員対象説明会及び保護者対象説明会などで、学部紹			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			介パンフレット「国際学部へようこそ!!」を用いて国際学部を紹介した。 有志の学生たちが中心となり、国際学部のインスタグラムの運用を開始し、学生目線から国際学部を中心とした大学の魅力を発信した。 国際学部の授業を体験し、本学に興味を持ってもらうため、高校での模擬授業を実施するとともに（実施回数12回）、高校生に国際学部の魅力を紹介した。 ・情報科学部では、入試広報の内容を充実させるとともに、情報科学部の特色ある教育プログラムである「イノベーション人材育成プログラム」及び「産学連携教育」を強くPRするため、オリジナルサイトをリニューアルした。 学部・研究科紹介パンフレット「『できたらいいな』ができてしまう“情報科学”」を作成し、配布した。 情報科学部の授業を体験し、本学に興味を持ってもらうため、高校での模擬授業を実施するとともに（実施回数9回）、高校生に情報科学部の魅力を紹介した。 高校及び高専を訪問し、高校の教員に対し入試説明及び学部紹介を行うとともに、本学の印象及び志願者動向等を聴取するなど、情報交換を行った。 ・芸術学部では、芸術学部オリジナルサイトの運用を開始した。本学ウェブサイトのリニューアルに併せて充実を図ることとしている。 高校訪問のほか（実施回数12回）、業者主催による進学相談会に参加し、芸術学部の広報を行った。 以上のように、「意欲ある優秀な学生の確保」について優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。			
⑵　学生への支援 全ての学生が心身ともに健康で充実した大学生活を送ることができるよう、学習環境、生活環境、健康管理、課外活動等様々な面で支援の	**⑵　学生への支援（小項目）** ア　新入生の大学への適応が円滑に進むよう、オリエンテーション等の充実を図る。	○3学部合同新入生オリエンテーションの実施、評価・改善	**小項目評価** ○3学部間の学生の交流を通して親睦を深め、今後の大学生活への適応を円滑に進めていくことを目的に、「3学部合同新入生オリエンテーション」を実施した（コロナ禍により、令和2年度と同様に参加者を2グループに分け、全プログラムを入れ替える形で2回実施）。新たな取組として、先輩学生（学生ICTサポーター）36人が、担当するクラスに分かれてオリエンテーリングに同行した。実施後アンケートの結果、「満足」又は「まあまあ満	a	**〔評価理由〕** 学生への支援について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○コロナ禍に対応して、様々な学生支援を積極的に行っている。	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
充実を図る。	イ　教職員によるきめ細かい支援・相談等の実施、学生同士の助言等が行える環境づくりに取り組む。	○教職員による支援・相談の充実、ピア・サポートの実施・評価・改善	足」との回答が89.7%と高かった。 【実施概要】 日時：令和3年4月7日（水）　9：00～12：10 場所：大学構内 実施内容：学生生活体験発表（留学1人、インターンシップ1人、ピア・サポート1人、「広島市立大学塾」1人、「いちだい知のトライアスロン」事業1人） オリエンテーリング（学内7施設、3学部混合グループで実施） ○教職員による支援・相談の充実、ピア・サポートの実施等に、次のとおり取り組んだ。 ・ピア・サポーター（学生17人）を中心に、ピア・サポート活動の運営を行った。運営に当たり、「心と身体の相談センター」の教員2人及び学生支援室職員1人がピア・サポーターの指導及び支援を行った。 【取組内容】 ・掲示板及び投書箱（りっすんポスト）の運用 ・オンライン交流会の開催 ・広報活動の強化（ウェブページの作成、いちピア通信の発行及び公式Twitterによる広報媒体の立ち上げ等） ・定期ミーティング開催（週1回程度） ・ピア・サポーターの追加募集及び養成 ・LINEオープンチャットの相談窓口の開設 ・いちピアラジオの新企画の運営 ・学外の臨床心理学の専門家を講師に招き、コミュニケーション力向上のための研修の実施 そのほか、学生同士の支援の一環として、日本人学生及び外国人留学生がお互いに母語を教え合う「ランゲージチューター制度」、留学生の大学生活等をサポートする「留学生バディ」並びに新入生のパソコン等の相談に対応する「学生ICTサポーター制度」を実施し、学生同士で支援を行う輪を広げることができた。 ・「心と身体の相談センター」の相談件数の急増に対応するため、後期から新たに、毎週月曜日に臨床心理士（1人）に相談対応業務を依頼し、相談支援の体制強化を行った。 ・コロナ禍により経済的に困窮する学生に対する支援事業とし		○臨床心理士を配置するなど、心と身体の相談センターの活動は、学生が学習に安心して専念できる環境を整えるものである。 ○コロナ禍により経済的に困窮する学生に対する支援は学生にとっては心強いだろう。 ○大学による環境（キャンパスのみならず地域の環境）への取組においては、学生の自発的なボランティア活動などとの更なる連携を模索することも検討されたい。	

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			て、次の取組を実施した。 【取組内容】 ・本学独自の応急奨学金の給付（2万円×315人） ・大学内の食堂及び売店で使用可能な金券の配付（1万円×200人） ・食品等の現物支給（約4千円分×452人） ・コロナ禍の影響を受けて家計が急変した学生を対象とする後期授業料の減免（高等教育の負担軽減制度対象外の学生に対する本学独自の支援制度） ・民間企業等からの寄附による食品や農産物等の寮生への配付			
	ウ　各附属施設等の設備、サービス内容の充実、各施設間の連携等により、学習環境及び学習支援体制の整備に取り組む。 エ　学生の心身の健康の保持増進を図るため、「保健管理センター」（仮称）の設置に向けて取り組む。	○外国語学習機会の充実をはじめとした各附属施設等における学習環境及び学習支援体制の充実 【令和2年度終了】	○各附属施設等において、学習環境の整備及び学習支援体制の整備に次のとおり取り組んだ。 ・附属図書館オリジナルサイト内で、図書館関係の学内限定動画（利用方法やトピックス等）を公開した。 コロナ禍によりオンライン授業が続く中、自宅等から電子書籍等の利用を促す記事を情報発信した（「お家de図書館」）。 「教員の眼で見た不用図書の選定会」を初めて実施し、開館27年を経て内容が古くなった配架図書の除架を、担当教員の協力を得て行なった（情報系図書約500冊及び国際系図書約500冊を除架）。また、「教員によるオンラインブック・ハンティング」を初めて開催し、学術的な目で図書の選書を行い、蔵書を充実させた。 学生アンケートの要望に応じ、「7～9月　土曜日特別開館」を実施した（臨時開館日10日、来館者数延べ254人）。 ラーニング・アシスタントの新規募集を行った（応募者35人のうち、3人を採用）。 附属図書館で広島県立図書館の図書を自由に予約し、受取及び返却を行うことができるよう、広島県立図書館との連携を開始した。 次期中期計画期間における学修及び教育支援機能並びに研究活動支援機能の強化、地域貢献並びに基盤整備についての附属図書館の将来像（基本目標及び取組事項）の検討を進めた。 ・語学センターでは、昨年度に引き続き、学生がオンライン授業を受講できるよう、語学センター教室のノートパソコンを語学センター外でも利用できるように整備し、提供した（貸			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			出台数40台）。 夏季及び春季休暇中に英語学習の機会を提供するため、昨年度と同様、eラーニングによる課外英語学習プログラム「リスニング・リーディング・文法」、「リスニング特化型」、「リーディング特化型」、「文法特化型」及び「文法基礎」の計5種類をオンラインで実施した（受講者数121人）。また、「アプリを利用した英語の発音・発話トレーニングのプログラム」（夏季休暇中実施、受講者数29人）、「新英会話入門（スタディサプリ）」（春季休暇中実施、受講者数25人）及び「総合英語コースアカデミック」（春季休暇中実施、受講者数24人）の3つを実施した。 TOEIC IP（オンライン形式、対面による監督）を、語学センター教室で全50回実施した（受験者数延べ2,314人）。 ・情報処理センターでは、令和4年度に策定するHUNET機種更新基本方針に生かすべく、教育用情報システム検討ワーキンググループと基盤システム検討ワーキンググループにおいて「HUNET2019」の客観的評価を行い、変更すべき要素を抽出した。コロナ禍により令和3年度前期は授業の大半をオンラインで実施したが、令和2年度に補強したシステムを継続して使用するとともに、関連マニュアルを改訂したことなどにより、大きなトラブルなくオンライン授業を実施できた。 情報科学部4年生及び情報科学研究科大学院生をティーチングアシスタントとして雇用し、学生のパソコン等に関する相談支援体制を整備するとともに、ネットワーク講習会を実施し、パソコン必携化をサポートした。 必携パソコンを活用した授業をサポートするため、無線アクセスポイント同時接続ユーザー数を令和2年度から4倍に増強した。 パソコン必携化による学内LANの通信量の変化を評価した。主として講義棟・国際学部棟及び情報処理センター集約スイッチ間の通信量をモニターしたところ、パソコン必携化による通信量大幅増は認められず、学内LANの性能に不足はないことを確認した。 Gakuen及びUniPaを用いた情報科学研究科及び教育DX専門部会主導の実証実験に、ネットワーク技術面でのサポートを行った。			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
また、学生自らが、社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現するための力を身に付けるよう、また、やりがいを持って働く生き方について考え、行動できるよう、入学時からキャリア形成に関する支援の充実を図るとともに、地元企業との連携強化等により、就職支援の充実を図る。	オ　卒業生及び地元企業との連携によるセミナーの実施、インターンシップの活用等により、入学時から就職・キャリア形成に向けた支援を充実する。平成33年度までに、インターンシップ参加学生数を年間63人（平成27年度42人）にする。	○キャリア教育関連科目の実施、キャリア形成に係る情報管理・発信、第3期中期計画期間に向けた就職・キャリア形成支援の評価・総括	○キャリア教育関連科目を実施するとともに、授業外でも、コロナ禍での実施方法等を工夫しながら取組の充実を図った。また、アントレプレナーシップを育む取組などを新たに開始した。 ◎キャリア教育関連科目の実施 開設科目及び履修者数は次のとおりで、履修者数の合計は令和2年度の約1.8倍に増加した。 ・キャリアデザインi（1・2年次対象、第1ターム）履修者数 333人 ・キャリアデザインii（1・2年次対象、第4ターム）履修者数 76人 ・インターンシップ・ベーシック（1・2年次対象、通年）履修者数 14人 ※40人の学生が講義に参加し、実際にインターンシップに参加して自己評価シート等を提出した14人の学生が単位を取得した。 ・キャリアサポートベーシックA（2・3年次対象、前期）履修者数192人 ※授業の1回に「活躍する市大人」と題し、企業の中堅職員として活躍するOBによる講演を新たに取り入れた。 ・キャリアサポートベーシックB（2・3年次対象、後期）履修者数107人 ・「地元企業の幹部に学ぶキャリアデザインセミナー」（3科目の授業の1回に位置付けて開催）履修者数 177人 ◎キャリア形成に係る情報管理・発信の充実 ・企業説明会及び求人に関する情報等を掲載するメールマガジン「キャリア通信」の配信 ・学内情報システム及びキャリアセンターオリジナルサイトを活用し、セミナー及び行事の情報を発信 ・広島県内企業の求人情報等を表示する新たなデジタルサイネージを3台設置及び運用 ・企業の担当者とその企業に内定した4年生とのパネルトークの実施（学生参加者数28人） ・新たに「アントレプレナーシップ入門セミナー」の実施（学生参加者数15人） ・「学生発！キャリアセミナー」として、起業家精神の育成等に取り組む学生グループのセミナー開催を支援			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
		○キャリア形成の視点に立ったインターンシップ等の支援の実施、第3期中期計画期間に向けた評価・総括	・就職活動の本格化に備え、学生が多様な企業から直接説明を受けることができる「学内合同企業研究セミナー」をオンラインで実施（令和4年2月14日から10日間、企業200社、延べ学生参加者数877人） ※セミナーについては、対面形式で実施するものについても、ライブ配信及び録画配信を併用することで、コロナ禍による影響が変化しても柔軟に対応できるように工夫した。 ・各学部の概要、就職状況及び学部生出身地等の情報をコンパクトにまとめたリーフレット「求人のための大学案内」を新たに作成し、企業に配付 ・学生のキャリアセンター利用促進のため、フリーベント（無料提供）飲料自動販売機の設置 ○キャリア形成の視点に立ったインターンシップ等の支援に、次のとおり取り組んだ。 ・キャリア形成支援科目で受講者にインターンシップへの参加を促したほか、キャリアセンターオリジナルサイトでインターンシップの募集情報を発信した。 インターンシップ参加後アンケートの結果の公表方法を、紙媒体から電子媒体に変更し、キャリアセンターオリジナルサイトから閲覧できるように改善した。 ・インターンシップの募集が、1年を通して見られるようになってきたことから、参加を希望する学生がインターンシップの基本的な流れ及び注意事項等をいつでも確認することができるよう、キャリアセンターオリジナルサイトに整理して掲載した。また、マナー研修の録画ビデオを、学生がいつでも自主研修できるようオンデマンドで公開した。 ・令和3年度のインターンシップ参加者数は、大学推薦インターンシップ（キャリアセンターを介して「大学が推薦する学生」として参加申込を行うもの）が8人、自由応募インターンシップ（学生の参加に当たり大学が関与しないもの）が71人、広島市有給長期インターンシップが2人、広島県インターンシップ促進協議会のインターンシップが4人で、合計84人（インターンシップ参加者実人数）となり、目標値（年間63人）を超えた。なお、84人中1・2年生は26人（31.0%）であり、令和2年度（26.2%）よりも低学年の割合が増加した。大			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	カ　学生のクラブ、サークル活動、ボランティア活動等を奨励するとともに、それらを支援するための設備及び制度の充実等を図る。 キ　RA(Research Assistant：大学院生が研究の補助を行う制度をいう。）の導入等により、大学院生の経済的支援の充実を図る。	○ボランティア活動への参加促進等課外活動の奨励・支援 【平成30年度終了】	学推薦インターンシップは、受入企業25社に対して学生の応募は6社7人と少なく、今後の実施方法等を見直す必要がある。 ・学生が企業を訪問する機会となる中国経済連合会との連携事業は、コロナ禍により中止となった。 ○学生のクラブ・サークル活動及びボランティア活動等を奨励・支援するため、次の取組を実施した。 ◎クラブ・サークル活動への支援 ・後援会費を財源にクラブ・サークルの活動経費への助成（助成数45団体、令和4年3月末現在5,496,541円） ・クラブ活動団体からの要望に応じ、体育館にアイシング用製氷機を、学生会館の部室にエアコン12台を設置 ・留学生の課外活動への参加を促進するため、英語版のクラブ・サークル案内一覧を作成 ◎ボランティア活動への支援 ・本学クラブ・サークル等に広島市主催「ごみゼロ・クリーンウォーク」（コロナ禍により中止）への参加を呼びかけ ・ボランティア掲示板を活用し、社会福祉協議会からのボランティア情報を学生に周知 ・令和3年10月キャンパス等クリーンキャンペーンの開催（参加クラブ・サークル数14団体、参加学生数78人） ・令和3年12月クラブ・サークル団体等を中心としたキャンパス等クリーンキャンペーンの開催（参加クラブ・サークル数16団体、参加学生数92人） ・学生のボランティアに対する意識及びボランティア活動状況等の実態を把握するため、ボランティアに関するアンケートを行い（回答者数202人）、ボランティア活動への奨励に関する今後の取組について検討を行った。 ・本学が主催又は取りまとめるボランティア事業に参加したクラブ・ サークルに対して、ボランティア奨励費を支給 以上のように、「学習環境等の整備、キャリア形成に関する支援等による学生への支援」について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			
3　研究に関する目標 教員それぞれの独創	**3　研究（大項目）**		**大項目評価** ○特色ある学部等の構成を生かした研究活動、外部資金の積極的な獲	b	**〔評価理由〕** 研究全般について計画どおり	B

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
性ある研究を推進するとともに、国際学、情報科学、芸術学及び平和学の特色ある学部、研究科及び研究所の構成を生かした横断的な研究、広島平和研究所を軸とした世界的な視点に立った平和研究、地域課題の解決に向けた研究をはじめ、個性的な研究活動及び学内外との研究交流を積極的に展開する。その研究成果を教育に反映させるとともに、社会に還元する。 　また、外部資金の積極的な獲得と活用により、研究の活性化を図る。			得等による研究活動の活性化 ・広島平和研究所では、広島発の平和学の構築及び発信を目指し、学外研究者との共同プロジェクト研究として、「アジアの平和とガバナンスの包括的研究」を進めた。その研究成果として、「アジアの平和とガバナンス」（有信堂）を出版した。また、広島に位置する大学の平和研究所として、広島の視点から日本、アジア及び世界の平和に関して発信を行うため、同所の全教員が執筆に参加し、「広島発の平和学 戦争と平和を考える13講」（法律文化社）を出版した。そのほか、オンライン研究フォーラムを開催し、ロシアのウクライナ侵攻という社会的に関心の高いテーマをいち早く取り上げた。 国際学部及び国際学研究科では、広島をテーマに各専門分野の多様な視点から研究活動に取り組んだ。その研究成果として、国際学部叢書(そうしょ)12「世界は広島をどう理解しているか 原爆七五年の五五か国・地域の報道」（中央公論新社）を刊行するとともに、中国新聞のリレーコラム「被爆75年　世界の報道を振り返る」に、同叢書(そうしょ)の執筆者が連載記事を投稿したほか、特別コロキアムを開催した。 芸術学部及び芸術学研究科では、教員及び学生が地域のニーズに応える形で、多くの受託研究及びアートプロジェクトを地域との協働により実施した。また、こうした芸術研究を発表するため、芸術資料館及び学外の作品展示スペースにおいて、様々な企画展等を実施した。 ・外部資金を獲得している教員の割合は目標値（年間63.8%）を下回っているものの、資金獲得に向けて、科学研究費及び外部資金獲得セミナー（FD・SDセミナー）を開催したほか、令和3年度からアドバイザー制度又は事前コメント制度の利用を科研費獲得支援研究費申請の条件とし、これら制度の積極的な利用を促した。 ○研究成果の積極的な公開及び還元 各学部等においては、叢書(そうしょ)及び紀要の刊行、研究会及び講演会等の開催、研究発表及び論文発表並びに展覧会等の開催及び出展などに積極的に取り組んだ。特に「広島市立大学産学連携研究発表会2021」においては、情報科学部及び情報科学研究科が中心となり、「広島発 地域から起こすイノベーション」をメインテーマに、本学研究者講演、情報科学研究科長講演、マッチングセッション及びポスター展示等をオンライン開催により行った。また、広島平和研究所で		着実に取組を実施したと認められることから、「Ｂ」と評価した。	

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			は、広島市の平和文化セミナー「わかるとかわる！核兵器禁止条約」の開催に協力し、同所教員が基礎講座の講師を務めた。 以上のように、研究全般について計画どおり着実に取組を実施したことから、「ｂ」と評価した。			
	⑴　<u>研究活動の活性化（小項目）</u> ア　国際学、情報科学、芸術学及び平和学の特色ある学部、研究科及び研究所の構成を生かした本学特有の新しい分野の研究活動並びに国際貢献及び地域貢献の視点で社会との関わりを意識した研究活動のより一層の活性化を図る。	○本学の特色を生かした新しい分野の研究活動や社会との関わりを意識した研究活動の活性化	小項目評価 ○本学の特色を生かした研究活動や社会との関わりを意識した研究活動の活性化のため、次のとおり取組を実施した。 ・広島平和研究所では、広島発の平和学の構築及び発信を目指し、学外研究者との共同プロジェクト研究として、「アジアの平和とガバナンスの包括的研究」を進めた。その研究成果として、「アジアの平和とガバナンス」（有信堂）を出版した。また、広島に位置する大学の平和研究所として、広島の視点から日本、アジア及び世界の平和に関して発信を行うため、同所の全教員が執筆に参加し、「広島発の平和学 戦争と平和を考える13講」（法律文化社）を出版した。 国際学部及び国際学研究科では、広島をテーマに、各専門分野の多様な視点から研究活動に取り組んだ。その研究成果として、国際学部叢書(そうしょ)12「世界は広島をどう理解しているか 原爆七五年の五五か国・地域の報道」（中央公論新社）を刊行するとともに、中国新聞のリレーコラム「被爆75年 世界の報道を振り返る」に、同叢書(そうしょ)の執筆者が連載記事を投稿した。 ・国際学部及び国際学研究科では、特別コロキアムを4回開催した。学内・学外から多数の研究者が参加し、活発な討論が行われ、研究活動の活性化に寄与した。 （コロキアムの内容） ・ミャンマーの現在 現地からの報告 ・ミャンマーの現状Ⅱ 現地からの報告 ・戦後の反核・平和運動、二つの原点：平塚らいてうと森瀧市郎 ・北海道の強制連行犠牲者の遺骨返還 芸術学部及び芸術学研究科では、教員及び学生が地域のニーズに応える形で、多くの受託研究やアートプロジェクトを地域との協働により実施した。また、こうした芸術研究を発表するため、芸術資料館及び学外の作品展示スペースにおいて、様々な企画展等を実施した。	a	〔評価理由〕 研究活動の活性化のための取組を計画どおり着実に実施したと認められることから、「Ｂ」と評価した。 〔コメント〕 ○中国新聞のリレーコラム「被爆75年 世界の報道を振り返る」への掲載による研究と報道との連携は、興味深い。 ○ロシアによるウクライナ侵攻については、全国の研究組織がオンライン・シンポジウム等を開催しているが、他機関のイベントに先駆けて平和研究所がフォーラムを開催したことは印象的であった。 ○科学研究費の採択率及び獲得金額の状況が好転していない。 ○科学研究費等外部資金獲得実績が減少傾向にある。	B

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	イ　研究活動を活性化するため、URA（University Research Administrator：研究者とともに研究活動の企画・マネジメント等を行うことにより、研究活動の活性化、研究開発マネジメントの強化等を支える人材をいう。）を導入するとともに、科学研究費をはじめとする外部資金の積極的な獲得に取り組む。平成33年度までに、外部資金を獲得している教員の割合を年間63.8%（平成27年度53.8%）にする。	○外部資金の積極的な獲得による研究活動の活性化	（芸術活動の内容） ・「京橋復元のためのモデリングデータの作成及びデザイン監修」 ・広島市立病院機構ロゴマークデザイン ・被爆資料の3Dデータ取得による3DCG及び形状複製物の制作 ・路面電車駅前大橋線の下路橋のデザイン ・「芸備線活性化プロジェクト」 など ○外部資金の積極的な獲得に取り組み、獲得した外部資金を活用して活発な研究活動を実施した。 【科学研究費等学部資金獲得実績】　（ ）は令和2年度実績 ・科学研究費 申請率62.7%（68.9%）、採択率50.9%（51.1%） 獲得金額（間接経費を含む。）85,115千円（103,870千円） ・受託研究、共同研究、補助金及び奨学寄附金 61件、80,256千円（62件、107,555千円） ・外部資金合計 165,371千円（211,425千円） ・外部資金獲得教員率50.5%（44.3%） （備考）科学研究費の申請率：申請件数（新規分＋継続分）÷教員数 科学研究費の採択率：採択件数（新規分＋継続分）÷申請件数（新規分＋継続分） 申請率、採択率及び外部資金獲得教員率は専任の教員のみで計算 ・教員の科学研究費獲得を支援するための科学研究費獲得支援研究費の公募及び配分を行った。 ・情報科学部及び情報科学研究科では、教員の研究活動の活性化及び外部資金獲得の意識を促すため、外部資金の間接経費相当額を、必要に応じて外部資金獲得者が利用できる制度を運用した。 ・外部資金を獲得している教員の割合は目標値（年間63.8%）を下回っているものの、資金獲得に向けて、科学研究費及び外部資金獲得セミナー（FD・SDセミナー）を開催したほか、令和3年度からアドバイザー制度又は事前コメント制度の利用を科研費獲得支援研究費申請の条件とし、これら制度の積極的な利用を促した。その成果として、利用件数が増加するなど、今後の外部資金の獲得に向け、着実な取組を実施した。			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	ウ　芸術研究の発表活動を促進するため、学内外の作品展示スペースの充実・活用に取り組む。	○既存の作品展示スペースの活用促進、新たな作品展示スペースの確保・充実に向けた検討	○芸術学部及び芸術学研究科では、芸術研究の発表活動を促進するため、既存の作品展示スペースの活用並びに新たな作品展示スペースの確保及び充実に取り組んだ。 【取組実績】 ・芸術資料館においては、新任教員展など7企画を実施した（合計開催日数71日、合計来場者数2,999人）。 ・芸術資料館のほか、合人社ウェンディひと・まちプラザでテーマ研究制作展2022「ひろしまサイコー」、ギャラリーGで「PRISOM」展、安芸高田市立八千代の丘美術館で広島市立大学日本画研究室展などを開催し、学外の展示スペースを活用した。 ・新ギャラリー設置構想に向けた全学的な検討を行い、複数の設置イメージのラフ図面及びコンピュータグラフィックスを制作した。			
	エ　広島平和研究所における研究活動を活性化するため、学外研究者の積極的な参画等を促進する。また、広島に立地する研究所として、核・軍縮等特定のテーマを定めたプロジェクト研究を実施する。	○学外研究者の参画促進及びプロジェクト研究の実施	○広島平和研究所では、外部研究者と共同で様々な研究活動及び研究発表を行った。特に、オンライン研究フォーラムでは、ロシアのウクライナ侵攻という社会的に関心の高いテーマをいち早く取り上げた。 【取組実績】 ・プロジェクト研究　：「アジアの平和とガバナンスの包括的研究」（学外研究者14人参加） ・国際ワークショップ　：「姜昌一大使講演会」及び「広島韓国フォーラム」（学外研究者6人参加） ・国際シンポジウム　：「流動化する東アジア」（学外研究者5人参加） ・オンライン研究フォーラム　：「ウクライナ侵攻―ロシア、人道危機、国際法」 以上のように、「特色ある学部等の構成を生かした研究活動、外部資金の積極的な獲得等による研究活動の活性化」について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			
	⑵　研究成果の積極的な公開及び還元（小項目） 論文発表及び出版による研究業績の向上に努める。加えて、叢書（そうしょ）の出版、シン	○叢書（そうしょ）の出版、シンポジウムや展覧会の開催等による研究成果の積極	小項目評価 ○各学部等において、次のとおり研究成果の積極的な公開及び還元に取り組んだ。 ・国際学部及び国際学研究科において、紀要「広島国際研究」第27巻を刊行した。	b	〔評価理由〕 研究成果の積極的な公開及び還元のための取組を計画どおり着実に実施したと認められることから、「Ｂ」と評価した。	B

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	ポジウム、研究公開イベント、展覧会の開催等により、研究成果を積極的に社会に公開及び還元する。	的な社会への公開及び還元	国際学部叢書12「世界は広島をどう理解しているか 原爆七五年の五五か国・地域の報道」（中央公論新社）を刊行するとともに、中国新聞のリレーコラム「被爆75年 世界の報道を振り返る」に、同叢書の執筆者が連載記事を投稿した。 ・情報科学部及び情報科学研究科において、「広島発 地域から起こすイノベーション」をメインテーマに、「広島市立大学産学連携研究発表会2021」をオンライン開催し、本学研究者講演、情報科学研究科長講演、バーチャルマッチングセッション、ポスター展示等を行った（当日視聴者数：第1部203人、第2部34人、オンデマンド視聴数164回）。 本学教員が実行委員となり第44回日本生体医工学会中国四国支部大会を開催した（参加者数54人）。 ・芸術学部及び芸術学研究科では、学外での研究発表として、個展14件、団体展18件、グループ展58件並びに論文、講演及びシンポジウム等での発表11件を行った。 ・広島平和研究所では、国際ワークショップとして「姜昌一大使講演会」及び「広島韓国フォーラム」を開催し、国際シンポジウム「流動化する東アジア」を開催した。 ニューズレター第24巻第1号、第2号及び紀要「広島平和研究」第9号を刊行した。 「広島発の平和学 戦争と平和を考える13講」（法律文化社）及び「アジアの平和とガバナンス」（有信堂）を出版した。 広島市の平和文化セミナー「わかるとかわる！核兵器禁止条約」の開催へ協力し、同所教員が基礎講座の講師を務めた。 【査読付き論文数】（ ）は令和2年度 国際学部8本（8本）、情報科学部87本（95本）、広島平和研究所4本（3本） 以上のように、「研究成果の積極的な公開及び還元」のための取組を計画どおり着実に実施したことから、「ｂ」と評価した。		〔コメント〕 ○研究成果の公開については引き続き優先課題として取り組まれたい。 ○一般向けの情報発信を積極的に行っている。しかし、専門家の査読を通過した論文数が少ない或いは伸びていない。	
4　社会貢献に関する目標 教育研究成果を社会に還元するため、社会連携センターを中心的な窓口として、学外研	**4　社会貢献（大項目）**		**大項目評価** ○公開講座の充実等による市民の生涯学習ニーズ等への対応 幅広い世代の様々な学習ニーズに応えるため、「黒い雨訴訟」判決の機会を捉えて開催した国際学部特別公開講座、高校生による情報科学自由研究、中学生及び高校生等対象の芸術学部サマースクール、社会人向け工芸及び版画技能講座、県立広島大学との連携公開	a	**〔評価理由〕** 社会貢献全般について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
究機関、企業、NPO、地域コミュニティ等との交流及び連携を積極的に推進する。 　また、広島都市圏の「知」の拠点として、提言、施策立案、技術供与等を通じて、地域行政課題の解決及び都市機能の強化に貢献する。 　さらに、広く市民に生涯学習の場を提供するため、公開講座の充実等を図る。			講座並びに小中学生向け科学実験教室「いちだいデジタルパーク」など、公開講座等を多数実施し、多くの市民が参加した。コロナ禍により一部開催困難となったものの、オンラインを活用し可能な限り開催した。 ○地域、行政機関及び企業など社会との連携の推進 広島市を中心に行政機関等からの受託研究を多数実施したほか、これら受託研究をはじめ、研究成果をPRする機会として、産学連携研究発表会を実施した。 企業との共同研究及び新しい研究費獲得を目指し、株式会社リバネスと、科学研究費など競争的研究費で不採択となった未活用の研究アイデアを集積するプラットフォーム「L-RAD（エルラド）」利用に係る協定を締結した。 芸術学部及び芸術学研究科では、地域及び行政機関からの要請に応え、市内外の各地において多種多様な地域展開型の芸術プロジェクト等を実施し、芸術の社会的役割を広く発信した。 学生及び教員の自主的な社会貢献活動及び地域連携事業を支援するため、「社会連携プロジェクト」及び「市大生チャレンジ事業」を引き続き実施した。 マイクロバスを購入して運行を開始し、地域での学生及び教職員の活動の利便性、機動性及び効率性を向上させ、本学の使命である地域貢献等の活動の活性化に寄与した。また、芸術学部学生による本学らしいラッピングを施工したマイクロバスを各地に走らせることにより、本学の認知度向上に加え、「地域に貢献する大学」としてのイメージアップを図った。 以上のように、社会貢献全般について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			
	⑴　生涯学習ニーズ等への対応（小項目） 　幼児から社会人まで幅広く市民の生涯学習ニーズ等に対応した公開講座等を開催する。	○小中高校生、市民、企業の技術者・研究者等を対象にした公開講座等の実施	小項目評価 ○幅広い世代の様々な学習ニーズに応えるため、次の公開講座等を実施した。 【開催実績】 ①国際学部公開講座 ・現代世界とマイノリティ・多様性（受講者数62人） ・広島原爆「黒い雨」訴訟－全面勝訴とその影響（受講者数53人） ・難民問題への問いかけ－ヒロシマの視点（受講者数55人）	a	**〔評価理由〕** 　生涯学習ニーズ等への対応について優れた取組を実施したと認められることから、「Ａ」と評価した。	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			②情報科学部公開講座 ・高校生による情報科学自由研究（受講者数82人） ・講演会（受講者数43人） ③芸術学部公開講座 ・中学生及び高校生等対象「サマースクール」（受講者数70人） ・社会人向け工芸及び版画技能講座(受講者数9人) ④県立広島大学との連携公開講座 ・ひろしまを考える(受講者数延べ135人) ・世界を知る(受講者数延べ111人) ⑤小中学生向け科学実験教室「いちだいデジタルパーク」（受講者数152人） ⑥市大英語eラーニング講座（第1期：受講者数65人、第2期：受講者数32人、第3期：受講者数43人） ⑦社会連携プロジェクト ・訪問型の小学生向け理科教室（計5回実施、受講者数31人） ・ひろしま医工学スクールSPRING2022受講者数（講演会54人、ハンズオンセミナー11人） ⑧「enPiT-Pro」事業 北九州市立大学が推進する「enPiT-Pro」事業と連携し、情報科学研究科において基盤技術を中心とした科目を提供しているほか、公益財団法人ひろしま産業振興機構との連携による､同事業から派生した、地元企業を対象とした社会人教育プログラム（AI、IoT、ロボットに関する入門編の授業）の提供に加え、一般社団法人中国経済連合会及び岡山大学と連携し、ニーズの高いセキュリティに関する講義・演習の提供を開始した。 コロナ禍により一部開催困難となったものの、オンラインを活用し、可能な限り開催した。 以上のように、「公開講座の充実等による市民の生涯学習ニーズ等への対応」について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			
	⑵　社会との連携の推進（小項目）		小項目評価 〇受託研究及び共同研究等の実施並びに展示会開催及び出展による	a	〔評価理由〕 社会との連携の推進について	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	ア　「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」を推進し、広島都市圏の活性化につながる教育研究活動を実施することにより、地方創生に貢献する。 イ　社会連携センターを窓口として、広島市をはじめとした行政機関、企業等からの受託研究、共同研究等に積極的に取り組む。	【令和元年度終了】 ○受託研究・共同研究等の実施、展示会開催・出展による研究成果のPR	研究成果のPRに次のとおり取り組んだ。 【取組実績】（ ）は令和2年度実績 ・受託研究、共同研究：47 件（48 件） 研究費計：48,979 千円（72,057 千円） ・補助金：3件（2件） 研究費計：21,311 千円（24,196 千円） ・奨学寄附金：11 件（12 件） 研究費計：9,966 千円（11,302 千円） 受託研究等の新規分として、「大竹手すき和紙と漆の壁面装飾タイルの制作」（大竹市）、広島市障害者差別解消推進条例に基づく「『“みんなのお店ひろしま”宣言制度』に係るシンボルマークのデザインに関する研究」（広島市）、「京橋復元のためのモデリングデータの作成及びデザイン監修」（広島市）など8件実施した。継続分として、「大型ごみの受入体制の改善」（広島市）、「広島型路面性状把握業務」（広島県、ひろしまサンドボックス行政提案型実証プロジェクト）、「大学と行政の協働による創造的な文化芸術活動や地域交流等を通じた、基町住宅地区の魅力づくりや持続的な活性化に関する研究」（広島市）など6件実施した。 これら受託研究をはじめ、研究成果をPRする機会も多数設け、本学の研究成果を公開した。具体的には、「広島市立大学産学連携研究発表会2021」（オンライン）を実施し、第1部で学外講師及び本学研究者の講演を行い、第2部では、バーチャルマッチングセッション・交流会を行った。また、広島市役所で開催予定であった「地域貢献事業発表会」はコロナ禍により中止したが、地域連携事業事例をウェブサイトで紹介した。他にも、「イノベーションジャパン2021～大学見本市Online～」（国立研究開発法人科学技術振興機構主催）への出展や、「マッチングフォーラム：心を推し量る人物映像解析」（公益財団法人ひろしま産業振興機構主催）、「スマートライフ新技術説明会【オンライン開催】」（国立研究開発法人科学技術振興機構及びさんさんコンソ主催）での研究シーズ紹介の参画に取り組んだ。また、世界の課題の解決及び地域における新たな産業創出を実現することを目指す創業支援プログラム「広島テックプランター」（株式会社リバネス主催）に参加し、本学教員が「リアルテックホールディングス賞」及び「トータテ賞・日本ユニシスBIPROGY賞」を受賞した。		優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○受託研究、共同研究、芸術プロジェクト及び社会貢献など、活発に充実した社会連携活動が行われている。マイクロバスの運行などは、広島市立大学の地域との連携を視覚化する効果を持つと思われる。 ○自治体及び企業との連携活動を多く進めている。	

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			イノベーションの創出を目指して、株式会社リバネスと、科学研究費など競争的研究費で不採択となった未活用の研究アイデアを集積するプラットフォーム「L-RAD（エルラド）」利用に係る協定を締結した。学内研究者の未活用の研究アイデアを同社に提供することにより、会員企業が閲覧し、新たな視点で再評価することで、企業との共同研究及び新しい研究費獲得を目指すこととしている。			
	ウ　地域社会との連携を通じた地域展開型の芸術プロジェクトを推進し、芸術の社会的有効性を発信する。	○地域展開型の芸術プロジェクトの実施	○芸術学部及び芸術学研究科では、地域及び行政機関からの要請に応え、地域展開型の芸術プロジェクト及び地域に根ざしたアートプロジェクト等を行ったほか、新たな取組として、地域の伝統文化及び地勢を生かした地域共創のプロジェクトに挑戦した。これらを通じて、芸術家の感性を生かした地域の魅力づくりや地域の活性化など、芸術の社会的役割を広く発信した。 【主なプロジェクト】 ・JR芸備線沿線の休耕田を活用した作品展示及び地域交流を行い、アート活動を通じた地域の魅力づくりに取り組む「芸備線活性化プロジェクト」（広島市） ・基町住宅地区の歴史から現在の課題を踏まえ、アーティストがそれぞれの視点で作品を制作し、基町の将来を考える機会を提供する「基(もと)いの町」（広島市） ・宮島の地域産業及び伝統技術の継承を目的とした「宮島轆轤（ろくろ）プロジェクト」（廿日市市） ・トムミルクファーム（東広島市豊栄町）において、デザインの必要性と有効性を、実践を通して学ぶ「アグリデザインプロジェクト」（東広島市） ・大竹和紙の技術継承及び新大竹駅舎内の壁面装飾タイルの制作によって地域の魅力づくりに取り組む「大竹和紙プロジェクト」（大竹市） ・地場産業である仏壇産業の課題及び魅力を学び、広島仏壇の伝統技術を継承する「広島仏壇プロジェクト」（東広島市） ・重要伝統的建造物群保存地区の空き家を活用しアートによる地域の魅力づくりに貢献する「とびしまプロジェクト」（呉市） ・江田島市能美町にある空き家を地域の人と交流できる空間に再生する「江田島プロジェクト」（江田島市）			
	エ　学生及び教職員の社会貢	○学生及び教員が実施す	○学生及び教員の自主的な社会貢献活動及び地域連携事業を支援す			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	献活動及び地域との連携事業を支援する。	る広島市や地域等との協働事業の支援	るため、「社会連携プロジェクト」及び「市大生チャレンジ事業」を引き続き実施した。 【取組実績】 ◎社会連携プロジェクト（教員の社会貢献活動等に対して1件当たり100万円を限度に事業費を支援する制度） 採択件数6件 ・ドローンと全天球カメラを活用した瀬戸の島の空き家PR作戦 ・訪問型の小学生向け理科教室の開催 ・「三都半島アートプロジェクト2021」 ・アート活動による地域の魅力づくり ・地域貢献のための教育プログラム「ひろしま医工学スクールSPRING2022」 ・和紙と漆のアートプロジェクト ◎市大生チャレンジ事業（学生の社会貢献活動に対して1件当たり15万円を限度に事業費を支援する制度） 採択件数3件 ・小さな祈り影絵展2021 ・ONE DREAM 2021 学生プロジェクト ・「リノベーション＋芸術航路－広島市立大学芸術学部有志展－」プロジェクト ※市大生チャレンジ事業報告会を初めて一般公開で行った（参加者29人）。 ◎いちだい地域共創プロジェクト（地域団体から地域課題の提案を受けて教職員及び地域団体が協働で課題解決に取り組む活動に対し1件当たり50万円を限度の事業費を支援する制度、令和4年度から実施） 令和4年度実施に向けて地域課題を募集し（応募件数8件）、地域団体並びに本学教員及び学生のマッチングイベントを実施した（採択件数7件、取下げ1件）。 ◎地域等からの依頼に基づき教職員及び学生が実施する連携事業等への支援 ・広島市沼田地区の小学校から大学までの10校で結成された「十六の会」作品展示会への学生作品の出展協力 ・ひろしま市議会だより創刊300号記念特集記事「市民を惹きつける市議会広報とは？」の座談会への参加学生の調整			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			（国際学部1人、芸術学部1人） ・「基町プロジェクト」が中区役所1階のロビーで令和4年の干支である「寅」をテーマにしたキャラクターのイラスト展「トラトラ展」を開催 ・有限会社芸州観光及び一般社団法人広島県観光連盟が進める「広島市におけるユニバーサルデザインマップ作成」への参加学生等の調整（情報科学研究科1人、情報科学部1人、国際学部3人） ・大塚公民館地域理解講座「見学！広島市立大学」への協力 ・「三篠の藍復活プロジェクト」（横川エリアマネジメント協議会）における藍染め体験等への協力 ・平和の大切さを知る児童向け芸術ワークショップ「PEACEキッズキャンパス」（広島市及び公益財団法人広島平和文化センター）への協力 ◎マイクロバスの運行 マイクロバスを購入して運行を開始し、地域での学生及び教職員の活動の利便性、機動性及び効率性を向上させ、本学の使命である地域貢献等の活動の活性化に寄与した。また、芸術学部学生による本学らしいラッピングを施工したマイクロバスを各地に走らせることにより、本学の認知度向上に加え、「地域に貢献する大学」としてのイメージアップを図った。 以上のように、「地域、行政機関、企業など社会との連携の推進」について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			
5　国際交流に関する目標 グローバルな知見を得るとともに、大学の国際化を推進するため、学生及び教員の国際交流を積極的に推進するとともに、留学生への支援の充実を図る。	**5　国際交流（大項目）**		**大項目評価** ○学術交流及び学生交流による国際交流の推進 コロナ禍により海外学術交流協定大学との学術交流事業は停止したものの、令和2年度後期から開始した「オンライン国際交流・異文化理解プログラム」による学生交流に力を入れて取り組んだ。具体的な成果として、マレーシア科学大学（マレーシア）及び国立台中科技大学（台湾）の2大学を新たな交流先として開拓し、目標値（派遣・受入留学プログラム参加学生数年間192人）を上回る217人（本学98人、相手大学119人）が参加した。また、同プログラムは、コロナ禍だけではなく収束後も大いに活用できるものであり、これからの国際交流における効果的な実施方法として高く評価している。	a	**〔評価理由〕** 国際交流全般について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			ハノーバー専科大学（ドイツ）との学術交流協定25周年（令和4年）に当たり、特別企画の実施に向けて、対象をハノーバー市民に拡大し、上田流和風堂との協働による茶会等とともにワークショップを開催するなど文化交流活動を展開することとして、実施検討並びに関係市及び関係機関との調整を進めた。その結果、令和4年8月6日及び同年10月に、ハノーバー市庁舎等において開催することとなった。 ○日本人学生及び留学生への支援の充実 国際学生寮「さくら」を活用した交流事業では、コロナ禍という制限を強いられる中、学生役職者が工夫しながら様々な交流促進に取り組んだ。 留学に係る支援について、海外学術交流協定大学派遣留学への助成金を12人に対し合計443,000円支給した。また、派遣留学に行く本学学生を対象に、海外リスクに加えコロナ禍を踏まえた海外渡航に係る危機管理セミナーを実施し、危機管理意識の醸成並びに安全対策及び危機対応に係るノウハウの提供を十分に行った。 留学している学生の帰国を迅速かつ円滑に進めるため、国の水際対策や滞在可能なホテルなどの情報を適宜学生に伝えるとともに、待機期間中のホテル滞在費を補助するなど、必要な支援を行った。 留学生への支援について、ｅラーニングによる日本語学習機会を提供したほか、留学生の大学生活及び日常生活をサポートする「留学生バディ」として2人の学生が活動を開始し、留学生の広島での生活や大学生活へのスムーズな適応に資する支援を行った。 日本人学生と外国人留学生が母語を教え合う「ランゲージチューター制度」や留学生の大学生活等をサポートする「留学生バディ」における活動を通じて、異文化理解の促進を図っている。 以上のように、国際交流全般について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			
	⑴　国際交流の推進（小項目） 言語、地域、学術分野等を踏まえた海外学術交流協定大学の戦略的な開拓、短期留学プログラムの新規実施等により、学術交流及び	○海外学術交流協定大学等との学術交流・学生交流等の推進・充実、第3期中期計画期間に向けた取組の評価・総括	小項目評価 ○コロナ禍により海外学術交流協定大学との学術交流事業は停止したものの、令和2年度後期から開始した「オンライン国際交流・異文化理解プログラム」による学生交流に力を入れて取り組んだ。具体的な成果として、マレーシア科学大学（マレーシア）及び国立台中科技大学（台湾）の2大学を新たな交流先として開拓し、目標値（派遣・受入留学プログラム参加学生数年間192人）	s	〔評価理由〕 国際交流の推進について特に優れた取組を実施したと認められることから、「Ｓ」と評価した。 〔コメント〕 ○「オンライン国際交流・異文	S

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	学生交流を推進する。平成33年度までに、派遣・受入留学プログラム参加学生数を年間192人（平成26年度96人）にする。		を上回る217人（本学98人、相手大学119人）が参加した。また、同プログラムは、コロナ禍だけではなく収束後も大いに活用できるものであり、これからの国際交流における効果的な実施方法として高く評価している。 ◎海外学術交流協定大学への派遣及び受入事業 ・派遣学生数：5人 長期派遣：西京大学校（韓国）、ハノーバー専科大学（ドイツ） ・受入学生数：3人 長期受入れ：ハワイ大学（アメリカ）、マレーシア科学大学（マレーシア）、シラパコーン大学（タイ） ◎海外学術交流協定大学等によるオンラインプログラムへの参加 ・国連平和大学（コスタリカ）オンライン平和学基礎コース（1人参加） ・マレーシア科学大学（マレーシア）オンライン交換留学プログラム（3人参加） ・ハノーバー専科大学（ドイツ）ICM Inter Cultural Management プログラム（1人参加） ◎芸術学部では、ハノーバー専科大学（ドイツ）の学生（5人）を対象に、オンライン授業を実施した。 ◎オンライン国際交流・異文化理解プログラム ・セントメアリーズカレッジ（アメリカ）（令和3年4月～同年5月実施、参加者数24人） ・マレーシア科学大学（マレーシア）（令和3年4月実施、参加者数7人） ・シラパコーン大学（タイ）（令和3年4月～同年6月実施、参加者数9人） ・国立台中科技大学（台湾）（令和3年6月実施、参加者数17人） ・セントメアリーズカレッジ（アメリカ）（令和3年10月～同年11月実施、参加者数12人） ・慶北国立大学校（韓国）（令和3年10月～同年12月実施、参加者数8人） ・シラパコーン大学（タイ）（令和3年12月～令和4年1月実施、参加者数9人） ◎海外学術交流協定大学との交流事業 ハノーバー専科大学（ドイツ）との学術交流協定25周年（令和4		化理解プログラム」をはじめ、各種の交流活動を活性化させている。 ○「オンライン国際交流・異文化理解プログラム」が軌道に乗ってきている。コロナ禍収束後も活用できる点は、評価できる。	

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			年）に当たり、特別企画として、対象をハノーバー市民に拡大し、上田流和風堂との協働による茶会等とともにワークショップを開催するなど文化交流活動を展開することとして、実施検討並びに関係市及び関係機関との調整を進めた。その結果、令和4年8月6日及び同年10月に、ハノーバー市庁舎等において開催することとなった ◎海外学術交流協定大学との協定の更新 ハワイ大学マノア校（アメリカ）及びコンコルディア大学（カナダ）と協定の更新を行った。 以上のように、「学術交流及び学生交流による国際交流の推進」について特に優れた取組を実施したことから、「ｓ」と評価した。			
	⑵　日本人学生及び留学生への支援の充実（小項目） ア　国際学生寮の整備を推進し、施設を活用した多様な交流を促進する。	○国際学生寮を活用した多様な交流事業の実施、第3期中期計画期間に向けた交流プログラムの評価・総括	小項目評価 ○国際学生寮「さくら」を活用した交流事業では、コロナ禍という制限を強いられる中、コロナ禍における施設利用の新たなルールを設けるなど、学生役職者が工夫しながら様々な交流促進に取り組んだ。なお、各事業は学生役職者が中心となって企画及び運営を行っており、人材育成の場ともなっている。 【取組実績】 令和3年4月　オンラインでの新入寮生歓迎会 同年8月　寮内夏祭り 同年10月　新入寮生歓迎会、折り鶴アート作成 同年11月　ハロウィンパーティー 同年12月　クリスマスパーティー 令和4年3月　送別会、他大学の国際学生寮生とのオンライン交流会	a	〔評価理由〕 日本人学生及び留学生への支援の充実について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○国際学生寮「さくら」における交流事業の企画及び運営を学生役職者が担っていることは、当事者にとっても得難い経験となっていると思われる。 ○各種の支援策を積極的に実施している。	A
	イ　日本人学生の派遣及び留学生の受入れに係る支援の充実を図る。	○日本人学生の派遣及び留学生の受入れに係る支援策の実施	○日本人学生の派遣及び留学生の受入れに係る支援を次のとおり実施した。 ・海外学術交流協定大学派遣留学への助成金を12人に対し、合計443,000円支給した。なお、コロナ禍により、短期語学留学及び交流プログラムは中止したため、助成金の支給はなかった。 【支給実績】 ・ハノーバー専科大学（ドイツ）　80,000×2人＝160,000円 ・西京大学（韓国）　13,000円×6人＝78,000円 ・慶北国立大学校（韓国）　13,000円×1人＝13,000円 ・レンヌ第2大学（フランス）　64,000円×1人＝64,000円			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
			・オルレアン大学（フランス）　64,000円×2人＝128,000円 海外学術交流協定大学へ留学する学生が留学前に行う外国語学習に対し、上限2万円まで助成する制度について、助成金の支給はなかった。 ジェイアイ傷害火災保険株式会社の協力のもと、派遣留学に行く本学学生を対象に、海外リスクに加えコロナ禍を踏まえた海外渡航に係る危機管理セミナーを実施し、危機管理意識の醸成並びに安全対策及び危機対応に係るノウハウの提供を十分に行った（参加者数19人）。 留学している学生の帰国を迅速かつ円滑に進めるため、国の水際対策及び滞在可能なホテルなどの情報を、適宜、学生に伝えるとともに、待機期間中のホテル滞在費を補助するなど、必要な支援を行った。 入寮者以外の全学生を対象とした外国語を学ぶ教育プログラム「さくらでミニ留学」を実施し、留学前の語学学習に寄与した。 学生に留学に興味を持ってもらうため、語学センター廊下を活用したギャラリースペースで、「さくらでミニ留学」の写真展を行った。 短期語学留学について、各国への渡航の状況及び海外学術交流協定大学の受入状況の把握に努め、実施可能性について検討を続けた。 ・日本語能力試験（JLPT）対策プログラム（受講者数10人）、「アプリを利用した英語の発音・発話トレーニングのプログラム」（受講者数29人）、「新英会話入門（スタディサプリ）」（受講者数29人）及び「総合英語コースアカデミック」（受講者数24人）などオンラインによる語学学習機会を提供した。 留学生の大学生活及び日常生活をサポートする学生ボランティア「留学生バディ」として、2人の学生が令和3年11月に活動を開始し、留学生の広島での生活や大学生活へのスムーズな適応に資する支援を行った。 国際学生寮では、留学生に住居の提供を行った。 ・日本人学生と外国人留学生が母語を教え合う「ランゲージチューター制度」及び留学生の大学生活等をサポートする「留学生バディ」における活動を通じて、異文化理解の促進を図っている。また、「ランゲージチューター制度」では、令和2年度に			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			開始したチューター教育の強化を図るための「日本語チューター対象ガイダンス」を令和3年度も実施した（受講者数20人）。 以上のように、「日本人学生及び留学生への支援の充実」について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			
第３　業務運営の改善及び効率化等に関する目標 １　業務運営の改善及び効率化に関する目標	第３　業務運営の改善及び効率化等に関する目標を達成するためとるべき措置 **<u>１　業務運営の改善及び効率化（大項目）</u>**					
			大項目評価 ○機動的かつ効率的な運営体制の構築 ・大学全体の教育の質保証、教育分野に係る各種計画及び教学を含めた大学運営全般にわたるIRの推進並びに教育のデジタル化の推進など、次期中期計画の重要課題に的確かつ着実に対応するため、専任講師（教学企画・IR担当）及び特任助教（IR担当及び教育DX担当各1人）の任用を決定した。 ・新入生、在学生及び卒業予定者を対象とした学生調査や、成績分布に係る分析を行った。分析結果を各学部及び研究科に提供するとともに、分析結果を踏まえてどのような改善方策が考えられるか具体例を示し、学部及び研究科のIRの実施並びに活用の支援を行った。 ・業務及びサービスのデジタル化を推進するため、各部門の職員で構成する「業務・サービスDXワーキンググループ」を設置し、大学業務の効率化及び改善に組織横断的に取り組んだ。令和3年度では、事務を遂行する上での問題点の抽出及び整理並びに業務のシステム化や外部委託化などの改善方法の仕分け等を実施した。 ○社会に開かれた大学づくりの推進 マツダ株式会社と本学芸術学部が共同で、新たなモノづくりと新たな時代を形成し得る人材の育成を目指す「マツダ・広島市立大学芸術学部共創ゼミ」を引き続き実施したほか、「いちだい地域共創プロジェクト」事業の令和4年度実施に向けて、地域課題を募集した。 ○自己点検及び評価による大学運営の改善並びに評価に関する情報の公開 ・自己点検及び評価の実施と、個々の教員における質保証を図るため、全教員が「教員活動における年度計画・自己点検結果シート」を作成した。	ａ	〔評価理由〕 業務運営の改善及び効率化全般について優れた取組を実施したと認められることから、「Ａ」と評価した。	Ａ

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			・内部質保証及び教学マネジメント体制の構築に向け、カリキュラムアセスメント（自己評価）、カリキュラム・コンサルティング（卒業予定者による評価）及びカリキュラムアセスメント・チェック（他学科教員による評価）を実施した。 ・大学基準協会第3期認証評価受審に向けて、「自己点検・評価報告書」の作成準備に着手した。令和3年度は、同報告書の執筆体制、認証評価スケジュール及び基準別執筆担当者案などを決定した。 ・IRに基づいた教学及び経営マネジメントの推進並びに内部質保証の充実を着実に推進していくための体制強化を検討し、内部質保証の強化に向けた総合調整等を行う理事長補佐に、令和4年度から副理事（内部質保証・IR担当）を充てることとした。 ○施設及び設備の効率的な維持管理並びに教職員の服務規律の確保等その他業務運営の改善 ・施設及び設備の維持保全に取り組んだ。特に令和3年度は、コロナ感染防止措置により電気及びガス消費量の増加を見込んでいたところ、エネルギー使用効率の高い設備の導入などにより、電気・ガス使用量の削減を実現した（電気消費量：対前年度比6.4%減、ガス消費量：対前年度比2.4%減）。 ・職場巡視、健康診断及びストレスチェック等を実施した。 ・令和元年度にハラスメント事案等が発生したことを真摯に受け止め、ハラスメント防止の啓発及び研究不正防止への意識向上のための取組に加え、ハラスメント防止に係る研修及び研究不正防止に係るeラーニング研修の実施などに、引き続き取り組んだ。特に令和3年度は、新たに理事補佐（コンプライアンス担当）を配置し、ハラスメント相談室長に充て常任化するなど、体制強化を図った。 ・危機管理マニュアル及び情報セキュリティポリシーの点検、見直し並びに運用を行ったほか、防火防災訓練を実施した。また、令和2年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症対策本部を運営し、緊急事態宣言等に伴う対応の基本方針、授業の実施方針及び応急奨学金等の学生支援など、様々な対応策を迅速に決定し、実施した。 以上のように、業務運営の改善及び効率化全般について優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。			
⑴　機動的かつ効率的な運営体制の構築 質の高い教育研究	**⑴　機動的かつ効率的な運営体制の構築（小項目）** ア　本学の特色を生かした教	○全学人事委員会におけ	小項目評価 ○全学人事委員会における教員の戦略的かつ機動的な任用・配置に次のとおり取り組んだ。	a	〔評価理由〕 機動的かつ効率的な運営体制の構築について優れた取組を実	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
が継続的に推進されるよう、中長期的かつ経営的視点から、幅広い人事体制の確保並びにコスト意識を持った業務改善及び効率化により、機動的かつ効率的な大学運営を行う。	育研究を推進するため、全学的かつ中長期的視点から教員を戦略的かつ機動的に任用・配置する。	る教員の戦略的かつ機動的な任用・配置	・学長のリーダーシップの下、全学的な観点から人事委員会での審議を重ね、採用方針が決定している常勤教員7ポストについて全ての任用を決定した。 ・大学全体の教育の質保証、教育分野に係る各種計画及び教学を含めた大学運営全般にわたるIRの推進並びに教育のデジタル化の推進等、次期中期計画の重要課題に的確かつ着実に対応するため、専任講師（教学企画・IR担当）及び特任助教（IR担当及び教育DX担当各1人）の任用を決定した。		施したと認められることから、「A」と評価した。	
	イ　事務の継続性及び職員の事務処理能力の専門性を高め、効率的かつ安定的な運営体制を構築するため、中長期的視点から職員を任用・配置する。	○法人事務職員（プロパー職員）採用・昇任の検討、職員育成・評価の実施、評価・改善	○法人事務職員（プロパー職員）の採用及び昇任の検討、職員の育成及び評価の実施並びにそれらの評価及び改善に次のとおり取り組んだ。 ・法人事務職員（プロパー職員）の人事異動実施要領を作成し、異動方針及び異動実施手順等を定めるとともに、配置換基準及び3級（係長級）への昇任基準を作成した。また、当該実施要領に基づき、所属長による異動及び昇任内申制度を新たに実施した。 ・人事評価要綱に基づき人事評価（能力評価及び業績評価）を実施した。 ・法人事務職員の任期満了に伴い、速やかに後任職員の採用手続を実施した。 ・プロパー職員の育成として、一般社団法人公立大学協会の「公立大学に関する基礎研修」に新規採用職員1人を、「公立大学職員セミナー」に採用3年目の職員1人を参加させた。			
	ウ　研修の充実等により、職員の能力向上を図る。	○公立大学職員セミナーへの参加、新規配属職員研修・業務研修等の実施	○FD・SD研修会等を実施し、職員の能力向上に取り組んだ。また、一般社団法人公立大学協会が主催する研修へ計5人が参加したほか、広島市の特別研修へプロパー職員が参加した。 【FD・SD研修会実績】 ・新任教職員FD研修（受講者数17人） ・令和3年度科学研究費・外部資金獲得セミナー（受講者数90人） ・安全保障貿易管理セミナー（受講者数72人） ・危機管理研修（受講者数179人） ・教育DXの取組について（受講者数99人） ・情報セキュリティ研修（受講者数73人） ・令和4年度「3学部合同基礎演習」担当教員説明会（受講者数21人）			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	エ　教育、学生支援、大学運営等の質の向上を図るため、IR（Institutional Research：学内の様々な情報を収集・分析し、大学業務の質の向上に活用することをいう。）を導入する。	○IRの実施・活用（情報収集・分析・改善）	・本学における利益相反マネジメントについて（受講者数84人） ・今後の地域志向教育のあり方について－検討状況の報告－（受講者数67人） ・アクティブラーニング研修会（受講者数77人） ○内部質保証委員会専門委員会を開催し、新入生、在学生及び卒業予定者を対象とした学生調査の調査項目及びスケジュールの見直しを行った。また、作業効率化に向けた作業スケジュール及び作業手順書を作成するなど、ルーチン化に向けた準備を進めた。令和3年度卒業予定者調査は、令和4年1月下旬から同年2月にかけて実施し、新入生及び在学生調査については、同年3月中に準備を完了した。 また、成績分布に係る分析を行い、分析結果を各学部及び研究科へ提供するとともに、分析結果を踏まえてどのような改善方策が考えられるか具体例を示し、学部及び研究科のIRの実施及び活用の支援を行った。 そのほか、IRの情報収集及び分析に係る作業効率化に向けた取組の一つとして、既存の学内の各種システムを紐づけた統合データベース（簡易EAI）の構築を行った。			
また、社会経済環境の変化に即応する経営を担保する観点から、学外専門家の一層の活用を図る。	オ　大学運営の効率化及び質の向上を図るため、学内外の多様な意見を活用しつつ、運営組織の在り方及び事務処理の内容・方法について定期的に点検し、必要に応じて改善を行う。	○運営組織の在り方や事務処理の内容・方法の点検・改善	○大学のデジタル化の推進や附属施設等運営体制の見直しのため、次の取組を実施した。 ・業務及びサービスのデジタル化を推進するため、各部門の職員で構成する「業務・サービスDXワーキンググループ」を設置し、大学業務の効率化及び改善に組織横断的に取り組んだ。令和3年度では、事務を遂行する上での問題点の抽出及び整理並びに業務のシステム化や外部委託化などの改善方法の仕分け等を実施した。また、大学事務のRPA化（ロボットによる業務自動化：Robotics Process Automation）を想定し、先行して大学事務フロー図の作成業務を実施した。 ・組織及び人員要求の機会を捉え、運営組織の在り方について点検した。また、次期中期計画における様々な重要課題への対応に向けて大学の附属施設等運営体制の見直しの検討を行った。内部質保証及びIRに係る取組を着実に推進するため、教職協働の組織として大学評価オフィスを設置することを決定した（令和4年度設置）。 ・新入教員（17人）を対象に、立替払等契約事務についての研修			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
			を実施し、適正な事務執行について周知した。 ・大学運営事務全般に係る事務マニュアルについて、新規事務事業に係るものの作成並びに既作成分の点検及び更新を行った。また、業務の効率化に当たり、課題、問題点及び方法等の整理を業者委託により実施した。 以上のように、「機動的かつ効率的な運営体制の構築」について優れた取組を実施したことから、「a」と評価した			
⑵　社会に開かれた大学づくりの推進 教育研究成果の積極的な広報及び大学ブランドの向上に向けた戦略的な情報発信の強化により、社会に開かれた大学づくりを推進するとともに、地域のニーズ等を的確に把握し、教育研究等への反映を図る。	**⑵　社会に開かれた大学づくりの推進（小項目）** ア　地域の企業・自治体等との積極的な連携・交流を通じて地域のニーズを的確に把握し、教育研究活動への反映等に取り組み、社会に開かれた大学づくりを推進する。 イ　教育研究等の実績の積極的な公開等により、教員活動の活性化と社会への説明責任を果たす取組を推進する。 ウ　魅力的で利用しやすいものとするため、ウェブサイトのリニューアルを行うとともに、英語版ウェブサイトをはじめとするコンテンツの充実に取り組む。また、多様なメディアの相互活用により、効果的かつ魅力的な広報を展開する。 エ　本学のブランドイメージの一層の浸透を図るため、コミュニケーションマーク等を用いた大学オリジナルグッズを開発し、活用す	○各種連携・交流事業等を通じた地域のニーズの把握と教育研究等への反映 【平成30年度終了】 【平成30年度終了】 【平成30年度終了】	小項目評価 ○地域のニーズを教育研究活動に反映させるため、次の取組を実施した。 ・マツダ株式会社及び本学芸術学部が共同で、新たなモノづくりと新たな時代を形成し得る人材の育成を目指す「マツダ・広島市立大学芸術学部共創ゼミ」を実施した。今年度は、宮島の地元のニーズに応え、「弥山霊火堂 消えずの火 灯火台デザイン」をテーマに学生が作品制作に取り組み、マツダ本社において完成作品の発表を行い、マツダ関係者から作品の講評を受けたほか、自治体や企業等と連携し、地域のニーズに基づいた様々な地域連携の事業を行った。 ・地域社会との積極的な連携による教育プログラム「産学連携教育」（情報科学部・情報科学研究科教育科目）の令和4年度実施に向け、提案募集を行った（応募件数18 件）。 ・新たな取組となる「いちだい地域共創プロジェクト」事業の令和4年度実施に向けて、地域課題を募集した（応募件数8件）。 以上のように、「社会に開かれた大学づくりの推進」について優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。	a	〔評価理由〕 社会に開かれた大学づくりの推進について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	る。					
2　財務内容の改善に関する目標	**2　財務内容の改善（大項目、小項目）**		**大項目評価** ○多様な収入源の確保及び経費の適正かつ効率的な執行による財務内容の改善 ・保有資産の有効活用及び収入確保のため、法人が所有する職員住宅の空き家について、令和2年度から学外者への貸付けを開始し、令和3年度は空き家6戸のうち、4戸（前年度2戸）について貸付料を歳入した。 ・コロナ禍による学生への支援を目的に広く寄附募集を行い、約700万円の財源を確保した。この財源を活用し、経済的支援が必要な学生に対する本学独自の応急奨学金の給付等を行った。また、基金の原資を増やすため、同窓会のウェブサイトや会報を通じて、呼びかけを行った。 ・情報科学部生の大学院情報科学研究科への進学を促進するための給付型奨学金の創設に向け、財源として民間企業からの寄附の受入れが内定した（令和4年度から年間500万円を受入予定）。 ・社会連携プロジェクトの実施、コロナ禍で経済的支援が必要な学生に対する食費等の支援事業の実施及び遠隔講義システムの整備に当たり、財源の一部として各種補助金を積極的に活用したほか、地元企業への就職促進を目的とした地元企業情報を配信するデジタルサイネージを設置し収入を得るなど、多様な収入の確保に努めた。 ・令和4年度予算編成に当たり、これまでの一律削減目標を設定する方法から、個々の事業の存続も含めて個別に査定する方法に転換した。その結果、令和2年度の実績（約1億1,800万円）を大きく上回る約2億3,000万円を節減し、次期中期計画の実現に向けた新規事業の実施などに必要な財源を確保した。 以上のように、財務内容の改善全般について優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。	a	〔評価理由〕 財務内容の改善全般について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。	A
⑴　自己収入の増加 教育研究環境を向上させるため、外部資金の積極的な獲得に取り組むなど、自己収入の増加を図	⑴　外部資金の獲得、大学が保有する施設・設備の利活用の促進等により、多様な収入の確保に努める。また、同窓会等との連携の下、教育研究活動の充実等	○多様な収入の確保、基金を増やすための活動等の実施	**小項目評価** ○多様な収入の確保及び基金を増やすため、次の取組を実施した。 ・法人が所有する職員住宅の空き家については、保有資産の有効活用及び収入確保のため、令和2年度から学外者への貸付けを開始しており、令和3年度は空き家6戸のうち、4戸（令和2年度2戸）について貸付料を歳入した。残りの2戸についても、引き	a	〔評価理由〕 財務内容の改善について優れた取組を実施したと認められることから、「A」と評価した。 〔コメント〕 ○同窓会と連携した寄附の呼び	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
る。	を目的とした「広島市立大学基金」（仮称）を創設する。		続き管理受託会社により入居者の募集を行っている。 ・コロナ禍による学生への支援を目的に広く寄附募集を行い、約700万円の財源を確保した。この財源を活用し、経済的支援が必要な学生に対する本学独自の応急奨学金の給付等を行った。また、基金の原資を増やすため、同窓会のウェブサイト及び会報を通じて、呼びかけを行った。 ［広報活動］ 退職予定教職員への寄附の呼び掛け ［基金の状況（令和4年3月末現在）］ 基金残高 8,170,691円 期首残高 7,799,010円 寄附金 7,214,000円 利息 81円 応急奨学金 △6,842,400円 寄附件数92件（個人）、1件（団体） ・情報科学部生の大学院情報科学研究科への進学を促進するための給付型奨学金の創設に向け、財源として民間企業からの寄附の受入れが内定した（令和4年度から年間500万円を受入予定）。 ・社会連携プロジェクトの実施、コロナ禍で経済的支援が必要な学生に対する食費等の支援事業の実施及び遠隔講義システムの整備に当たり、財源の一部として各種補助金を積極的に活用したほか、地元企業への就職促進を目的とした地元企業情報を配信するデジタルサイネージを設置し収入を得るなど、多様な収入の確保に努めた。 ・「広島市立大学産学連携研究発表会2021」第2部において、本学研究者及び企業関係者のバーチャルマッチングセッション・交流会を行ったほか、本学研究者の紹介サイト等を更新し、外部資金の獲得に向けて研究成果のPRを行った。また、公開講座等受講料による収入を得た。 【収入実績】 受託研究、共同研究、補助金及び奨学寄附金（61件） 8,0256,712円 公開講座等受講料 2,497,000円		かけ及びそれによる困窮学生の学業継続支援は意義深い。 〇寄附金確保により、コロナ禍の学生支援ができたことは良かった。 経費節減及び効率化にも積極的に取り組んでいる。	
⑵ 運営経費の見直し質の高い教育研究	⑵ 大学の持続的な発展のため、大学運営の恒常的な見	〇各部局、委員会、事務局における経費の適正	〇令和3年度予算案の内示に際し、事務事業を効率的に執行し、経費節減を図って各事業を実施するよう学内に通知した。また、新			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
が継続的に推進されるよう、経営的視点から、人員配置を含め、大学運営に関するあらゆる経費の見直し及び効率的な執行を図る。	直し・改善を通じ、教職員一人一人のコスト意識を高め、経費の適正かつ効率的な執行に努める。	かつ効率的な執行、事務事業の点検・見直し	入教員（17人）を対象に、適正な事務執行に係る研修を実施した。教員研究費については、引き続き3年間を一つの単位として年度を越えた研究費の活用を可能とし、計画的かつ効率的に執行できるようにした。 令和4年度予算要求に当たり、事務事業の経費節減を念頭に新規事業等の実施に必要な財源確保に取り組んだ。運営費交付金の大幅な減少を想定して、限られた財源の有効活用を図る観点から、緊急性、重要性及び費用対効果等を十分検討した上で予算要求を行うよう学内に通知するとともに、事務局内職員を対象に説明会を実施した。なお、予算要求調書を見直し、事業の目的、必要性及び効果を記載することとし、各担当職員が要求の段階で改めて見直しの認識を持てる工夫を行った。 予算編成に当たっては、運営費交付金収入をはじめ極めて厳しい収入状況が想定されることから、継続事業費全体を削減するため、これまでの一律削減目標を設定する方法から、個々の事業の存続も含めて個別に査定する方法に転換した。その結果、令和2年度の実績（約1億1,800万円）を大きく上回る約2億3,000万円を節減し、運営費交付金の減少を見据えつつ、次期中期計画の実現に向けた新規事業の実施などに必要な財源を確保した。 予算配分に当たっては、これまでの個別通知を改め、事務局内組織が予算配分内容を共有し、財務システムでの確認が容易にできるよう表示内容の工夫を施した。 さらに、経常的な業務全般について事務マニュアルを作成し、定期的な点検を行うとともに、事務処理の内容及び方法について改善を図るため、事務の仕分けや大学事務フロー図作成業務に係る業務委託を実施した。 以上のように、「多様な収入源の確保及び経費の適正かつ効率的な執行による財務内容の改善」について優れた取組を実施したことから、「ａ」と評価した。			
3　自己点検及び評価に関する目標 自己点検、自己評価及び第三者機関による評価を定期的に実施することにより、大学運	**3　自己点検及び評価（小項目）** 自己点検及び評価の結果を大学運営の改善につなげるとともに、評価結果をウェブサイト等で積極的に公開する。	○教学マネジメントをはじめとする内部質保証システムの確立に向けた取組の推進、第2期中期計画の評価・総括と第3期中期計画の策	**小項目評価** ○教学マネジメントをはじめとする内部質保証システムの確立に向けた取組の推進、第2期中期計画の評価及び総括、次期中期計画の策定並びに次期認証評価に向けた準備のため、次の取組を実施した。 ・自己点検及び評価の実施と、個々の教員における質保証を図る	a	**〔評価理由〕** 自己点検及び評価について優れた取組を実施したと認められることから、「Ａ」と評価した。	A

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
営の改善に努める。また、評価に関する情報を積極的に公開する。	また、内部質保証（高等教育機関が、自らの責任で自学の諸活動について点検・評価を行い、その結果を基に改革・改善に努め、それによって、その質を自ら保証することをいう。）の強化に取り組む。	定、次期認証評価に向けた準備	ため、全教員が「教員活動における年度計画・自己点検結果シート」を作成した。 ・内部質保証及び教学マネジメント体制の構築に向け、カリキュラムアセスメント（自己評価）、カリキュラム・コンサルティング（卒業予定者による評価）及びカリキュラムアセスメント・チェック（他学科教員による評価）を実施した。 ・令和2年度業務実績報告書を作成し、法人評価委員会からの評価を受けた。また、学内、広島市及び法人評価委員会との調整を行い、次期中期計画を策定した。 ・大学基準協会第3期認証評価受審に向けて、「自己点検・評価報告書」の作成準備に着手した。令和3年度は、同報告書の執筆体制、認証評価スケジュール及び基準別執筆担当者案などを決定した。 ・IRに基づいた教学及び経営マネジメントの推進並びに内部質保証の充実を着実に推進していくための体制強化を検討し、内部質保証の強化に向けた総合調整等を行う理事長補佐に、令和4年度から副理事（内部質保証・IR担当）を充てることとした。 以上のように、「自己点検及び評価による大学運営の改善並びに評価に関する情報の公開」について優れた取組を実施したことから、「a」と評価した。			
4　その他業務運営に関する重要目標 ⑴　施設及び設備の適切な維持管理等 快適なキャンパス環境を確保するため、既存の施設及び設備の適切な維持管理及び計画的な改修を行う。	**4　その他業務運営（小項目）** ⑴　施設・設備の効率的な維持管理と長寿命化を図るため、「広島市立大学保全計画」（仮称）を策定し、計画的な維持保全に取り組む。	○「広島市立大学保全（長寿命化）計画」に基づく維持保全の実施	**小項目評価** ○施設及び設備の維持保全のため、次の取組を実施した。特に令和3年度は、ソーシャルディスタンスを確保するための教室の分散などのコロナ感染防止措置により電気及びガス消費量の増加を見込んでいたところ、エネルギー使用効率の高い設備の導入などにより、電気及びガス使用量の削減を実現した（電気消費量：対前年度比6.4%減、ガス消費量：対前年度比2.4%減）。 【取組実績】 ・将来の大規模保全工事に備え、広島市との技術支援協定の締結に向けた調整 ・施設保全（長寿命化）実行計画に対して令和2年度実績を反映させた所要の改正 ・講義棟・国際学部棟他のファンコイルユニット等空調設備の更新プランの作成 ・工房棟、学生会館及び構内外灯の水銀灯設備のLED化	b	**〔評価理由〕** その他業務運営のための取組を計画どおり着実に実施したと認められることから、「B」と評価した。 〔コメント〕 ○ハラスメント事案及び研究不正事案等については万全な再発防止体制を整備されたい。 ○男子学生が被害に遭うケース及びLGBTQ関係でも一層の配慮が求められるようになるなど、ハラスメントの内容も多様化している。一旦それらが学生によってSNS等で拡散さ	B

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
⑵　安全で良好な教育研究環境の確保 学生及び教職員の安全衛生管理、人権及び法令遵守に関する意識の向上を図るとともに、災害等不測の事態に適切に対応できる体制の充実に取り組むことにより、安全で良好な教育研究環境を確保する。	⑵　職場巡視、研修の定期的な実施等により、教職員の健康の保持増進及び安全衛生管理の向上を図る。	○衛生管理者の養成、安全衛生管理研修・職場巡視等の実施	・入学試験会場として活用した講義棟・国際学部棟及び芸術学部棟の換気装置の機器更新 ・不具合が確認された高圧受電設備の維持保全を含む、基幹設備の機能回復修繕 ・大学施設内の要改善箇所（雨漏り箇所）の修繕 ・電気受給契約の入札（基本料金引下げのための契約電力30kWh引下げ及びエネルギー使用効率の高い設備の導入など） ○衛生管理者の養成、安全衛生管理研修及び職場巡視等の実施に、次のとおり取り組んだ。 【取組実績】 ・衛生管理者の養成 教職員の衛生管理者免許の受験費用（試験手数料、旅費及びテキスト代金）を支給し、受験を勧奨した（令和4年3月末時点の衛生管理者免許保持者は6人）。 ・安全衛生管理研修の実施 心理療法士を講師として招へいし、コロナ禍のストレスマネジメントをテーマとしたメンタルヘルス講習会を実施した（受講者数39人）。 ・職場巡視の実施 衛生委員会の開催に併せて2か月に1度、職場巡視を実施した。なお、令和4年1月及び同年3月の巡視は、コロナ禍を踏まえ、事務局職員による巡視結果の報告を代替とした。また、労働安全衛生規則第15条に基づく週に1度の作業巡視を事務局により実施し、良好な職場環境の維持及び向上に努めた。 ・健康診断の実施 法令に基づき、教職員定期健康診断及び特殊健康診断を実施した（受診率95.6%）。 ・衛生委員会の開催 原則1か月に1回、衛生委員会を開催した。 ・ストレスチェックの実施 教職員が自身の心の状態に気付けるようにストレスチェックを実施した。高ストレス状態にあると判定された職員については、結果表を渡す際に産業医による個人面接の案内を行い、2人の面談を実施した。 ・新型コロナウイルス感染症対策の実施		れると、大学のイメージ低下はもちろんのこと、大学の姿勢に対して鋭い批判がなされるようになる傾向が見られる。学生からは匿名で相談等ができる仕組みも導入されたようであるが、学生等から情報提供があった際の初動の対応が後手に回らないよう、相談室及び防止委員会において学生の立場に立った活動がなされるよう一層の配慮をなされたい。	

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	⑶　法令遵守及び各種ハラスメント等の防止に関する研修等の実施により、教職員の服務規律の確保を図る。	○ハラスメント防止のための取組の推進、研究不正防止その他服務規律を確保するための研修会等の実施	職場における感染症拡大を防止するためのチェックリストを衛生委員会で審議し作成した。 ワクチンの職域接種について、広島修道大学の接種に参加できるよう調整し、希望する教職員約100人がワクチン接種を行った。 教職員の感染予防対策として、学内主要箇所への飛沫防止用アクリル板、足踏み式消毒スタンド及び非接触式検温器の設置並びにエレベーターの使用人数制限を引き続き行った。また、在宅勤務や勤務時間の変更を促進した。 ○令和元年度にハラスメント事案等が発生したことを真摯に受け止め、引き続き、ハラスメント防止対策及び研究不正防止対策の強化に次のとおり取り組んだ。 ◎ハラスメント防止のための取組の推進 ハラスメント防止及び対応ガイドラインに基づき、ハラスメント防止の啓発及びハラスメント相談対応等の取組を推進した。 ・教職員及び学生にハラスメント防止リーフレットを配付するとともに、本学ウェブサイトへの掲載、メールでの周知を行うなど、ハラスメント防止の啓発を行った。 また、各部局等の単位で、全構成員が参加して、ハラスメント防止に係る研修を開催するとともに、ハラスメントを含む他大学の不祥事事例について、全教職員に対して、随時情報提供し、注意喚起を図った。 ・新たに理事補佐（コンプライアンス担当）を配置し、ハラスメント相談室長に充て常任化するなど、体制強化を図った。 ・ハラスメント相談室の相談員の研修を行うなど、相談員のスキルアップを図った。 ・ハラスメント防止委員会において、学生からハラスメント防止対策に係る意見聴取を行い、ハラスメント防止対策等の検討を行った。 ◎研究不正防止等の服務規律の確保に係る取組 ・国のガイドライン改正を受けて、令和3年10月に「公立大学法人広島市立大学における公的研究費の管理・監査及び研究活動における不正行為への対応に係る取扱方針」を改正するとともに、当該方針及び「公的研究費不正使用防止計画」に基づき、研究不正防止に向けた取組を実施した。 ハンドブックを改訂し、その内容について各学部教授会等で			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価 評価理由等	記号	評価委員会による評価 評価理由・コメント等	記号
	⑷　災害等不測の事態に適切に対応できるよう、危機管理マニュアルの点検・見直し等を行う。	○危機管理マニュアルの点検・見直し等の実施	周知した。あわせて、他機関における不正発生事例についてまとめた資料を配布し、構成員の研究不正防止への意識向上を図った。 また、教員及び対象職員にｅラーニング研修を実施した（受講率教員100%、職員100%）。 ・令和3年10月に、ハラスメント防止及び研究不正防止等の服務規律の一層の確保を図るため、ハラスメント行為等に対する懲戒処分の標準例を策定し、全構成員に周知した。 ○危機管理マニュアルの点検及び見直し等の実施として、次のとおり取り組んだ。 ・令和2年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症対策本部を運営し、緊急事態宣言等に伴う対応の基本方針、授業の実施方針及び応急奨学金等の学生支援など、様々な対応策を迅速に決定し、実施した。 令和3年9月に、新型コロナウイルス感染予防及び拡大防止ガイドラインを作成した。基本的な感染予防対策等について定め、学内における感染防止対策を徹底して実行するとともに、感染が疑われる場合及び感染が判明した場合には、同ガイドラインに定めた基本的な対応に沿って迅速かつ適切な対応を行った。 ワクチンの職域接種についての広島修道大学との調整及び後期からの対面授業開始の諸準備などを実施した。 危機管理制度の体系に基づき、事務局災害対応マニュアルに火災、風水害及び地震に係る危機管理事象別マニュアルを掲載した。 防火防災訓練については、講義棟・国際学部棟において、感染防止に配慮しながら、緊急放送を合図に教職員で構成する自衛消防隊員が活動する方式の訓練を行い、緊急時の初期活動体制の確認を行った。 また、気象情報や災害情報について、随時、全教職員にｅメールで情報提供する取組を継続した。 ・情報セキュリティの確保に努めるため、適宜、情報セキュリティポリシーの点検及び見直しを行っている。令和3年度においては、教育DXの取組を踏まえた情報資産の管理及びコロナ禍で利用が拡大したテレワークを行う場合に必要な対応などについての改正を行った。 ・全教職員を対象として、情報セキュリティ自己点検を実施し			

中期目標	中期計画	令和3年度 年度計画	公立大学法人広島市立大学による自己評価		評価委員会による評価	
			評価理由等	記号	評価理由・コメント等	記号
			た。 また、令和3年度から、広島市と連携して情報セキュリティ監査を開始した。監査の実施に当たっては、担当職員に対して、監査実施内容等についてのSD研修を実施した。 以上のように、「施設・設備の効率的な維持管理、教職員の服務規律の確保等その他業務運営の改善」のための取組を計画どおり着実に実施したことから、「ｂ」と評価した。			

広島市公立大学法人評価委員会　委員名簿

職 名	氏　名	現　職　等	備 考
委員長	石田　　淳	東京大学教授	
委　員	河原　能久	広島大学名誉教授	
委　員	北郷　　悟	東京藝術大学名誉教授	
委　員	原田　武彦	弁護士	
委　員	深見 希代子	東京薬科大学名誉教授	